日本醫史學雜誌

第 8 巻　第 1.2 号

昭和32年11月10日発行

西洋医育創始百周年記念特集号

序…… 緒方富雄・内山孝一・北村精一 …（1）

長崎ことにその医学校に関する知見報告

（ポムペ原著「日本滞在五年」抄訳）……荒瀬　進 …（5）

あ と が き ……荒瀬　進 …（88）

ポムペ肖像……（巻頭）

長崎養生所全景……（巻頭）

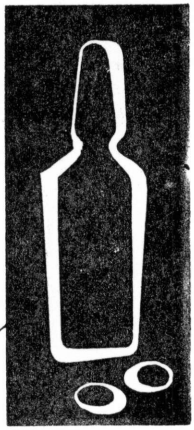
編集後記・学界消息……（89）

通　巻　第1348号

日　本　医　史　学　会

東京都板橋区大谷口町724　日本大学医学部内山生理

振 替 口 座　東 京 15250 番



循環系ホルモン剤

カリクレイン

冠状動脈，脳，横紋筋，皮膚及び肺の末梢血管の拡張作用のみならず，血管痙攣の抑制作用もあり，全身の血行を改善し、組織への栄養を良好に致します．

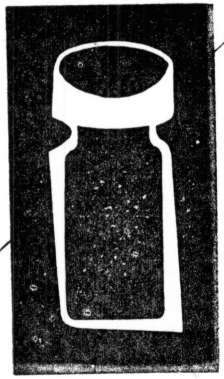
注：10単位　5管　¥840
錠：10単位　20錠　¥980
　　10単位　100錠¥4,300

BAYER　»Bayer« Leverkusen

高単位・持続性 循環系ホルモン剤

デポ・カリクレイン

カリクレインの作用を合理的且つ持続的に発揮せしめる目的で、研究完成された新製品で，その適応域は更に広汎です．



注：40単位　5アンプル入　¥ 1,800
新発売　25 アンプル入　¥ 7,900

両剤共保健適用

★文献集送呈

バイエル製品に関する御照会は吉富製薬バイエル薬品部へ

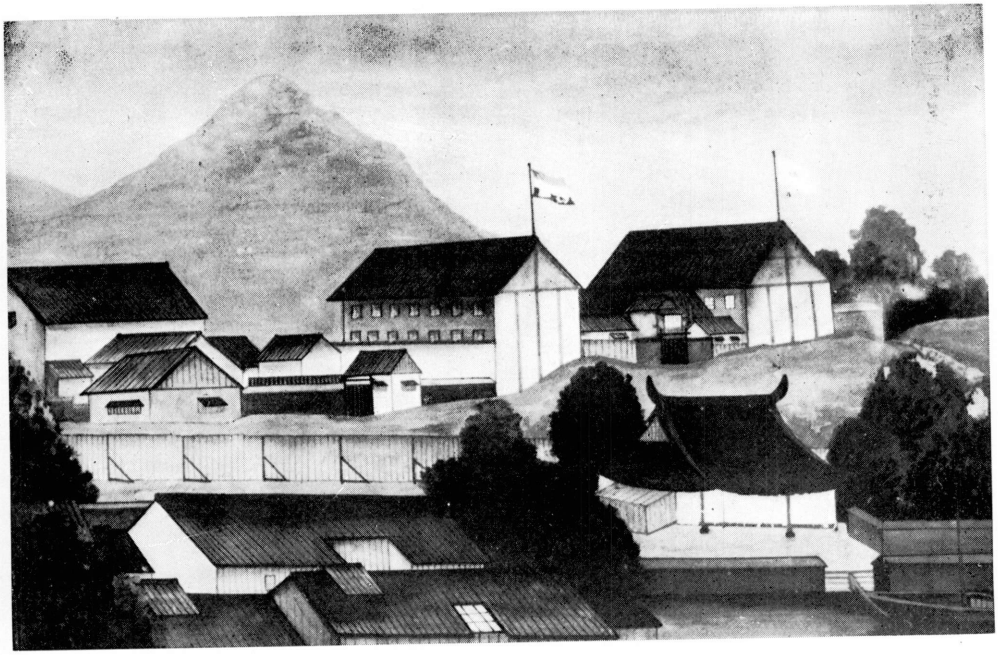
輸入元　吉富製薬株式会社　　販売元　武田薬品工業株式会社
大阪市東区道修町二

(B89)

ポムペ先生肖像

——1862年頃の写真——

(佐藤道夫博士蔵)



長崎養生所の全景

——幕末の極彩色泥絵——

（長崎大学医学部蔵，緒方富雄博士寄贈）

序

ポムペ・ファン・メールデルフォールトは、一八五七年九月から一八六二年十一月までの五年間長崎で、本格的な西洋医学を、本格的な組織と規模とで日本の医学生に教授した最初の人である。しかもポムペの教育はまことに徹底的であつた。

それまでは日本の進歩的な医師は、杉田玄白以来の蘭学によつて、ほとんど書物ばかりから間接に西洋医学を学びとつていたもので、それでもそれ相当の成績をあげていたとはいうものの、その基礎はまことにまずしいものであつた。それゆえ、日本の医学生はポムペにたたきこまれて、はじめて本当の西洋医学を知つたのである。

ポムペの厳格な本格的な医学教育の影響はすぐに江戸にもたらされ、わが国の西洋医学教育の主流のみなもとなつた。それは決して偶然ではない。

ここにかかげられた文はポムペの「日本における五年」のうち医学に関係のある部分の反訳で、ポムペが日本人に正しい医療をほどこし、正しい医学を教えるのに、どれほど苦心したかが、つぶさにうかがえて、まことに感銘が深い。

それがポムペが日本で教育をはじめてからちようど百年後の今日刊行されることはまことに意義が深い。訳者荒瀬進博士は、ポムペに直接教えを受けた荒瀬幾造の孫にあたり、篤志の人である。博士が特にわたくしに序を求められたのは、わたくしの祖父緒方惟準もまたポムペの同門であるという縁によるのである。

わたくしは、ただただ博士の労作に謝意を表し、博士の篤志に心からの尊敬をささげるのみである。

昭和三十二年十月

東京大学医学部
緒方富雄

ポムペが日本文化に与えた功績

今から百年前、ポムペの来朝した頃の日本は将に危機に直面していたといつてよいであろう。すなわち国の内にあつては永い間の封建社会から明治維新の文明開化に向う不安状態にあり、国際的にはインドをはじめ支那等東洋諸邦は欧米諸強国の植民地化していた。日本だけがよくこれを免れ得たのは幸いであつた。

ポムペはかかる状勢下に来朝し、ヨーロッパ最新の医学をわがくにの諸生に伝えた。彼は一人でよく医学諸科——基礎及び臨床に亘つて講義をし、実際の診療を行つて医学教育を実現した。これによつて西洋の医学、広くは西洋の文化を日本に伝えた。この文化史上の功績は百年後の今日にあつて、なお且つ大いに顕彰し感謝したい。この意味からも彼の「日本滞在五年」が荒瀬進博士により抄訳されたことは記念すべきである。

一九五七年初秋

日本医史学会代表
内山　孝一

序

今から満十年前の十一月十二日に本学部は附属病院北講堂で、ささやかな開学九十周年記念式を挙行した。その際開学以来の史録の一端を興味深く講演された名誉教授国友鼎先生も、郷土史家として有名であつた古賀十二郎先生も今はすでに亡い。十年を経た今日、第百周年記念式を行うことが当然となつた。百年という歳月は、決して簡単なものではない。また一大学が百年祭を行うことは、日本では初めてである。そこで何とか意義の深い記念式典を催したいものと、学部を挙げて考えた。

満百年前の安政四年十一月十二日という日は、実に蘭医ポムペ・フアン・メールデルフオールト先生が今日の長崎県庁正門附近にあつた医学伝習所で、初めて現代医学の第一頁を講義した日である。この意義深い日を卜して現代の西洋医学教育発祥百年記念日と銘うち、ポムペ先生の偉大なる功績を顕彰すると同時に、本学の開学百周年記念日として祝福するのは、けだし本学部に職を奉ずる医学徒は勿論、経営管理に任ずる人々も共に満腔の喜びを以て迎えてしかるべき佳節かと信ずる。

この記念式典にふさわしく、且つ学問教育上にも適した事業をとあれこれ考えたがなかなかむずかしく、ようやく次の数件を決定した。

(一) 本学名誉教授林　郁彦先生が昭和九年に『養生所址』として長崎西小島町の佐古小学校々庭に建立された碑を、今回ポムペ先生の顕彰碑として本学校庭に移し、記念式当日除幕する。

(二) 前記の養生所址には新たに銅版入りの碑と、また医学伝習所址にも碑を建立する。

(三) ポムペ先生ならびに過去百年間の長崎を中心とした医学に関する展示会、および展示史料の解説目録作製。

(四) 「長崎医学百年史」の編纂。

(五) 十一月十二日にはオランダ大使夫妻を迎えてポムペ先生顕彰碑の除幕式を行い、ついで記念式典、さらに山崎

佐博士と緒方富雄教授のポムペ先生前後の日本医学に関する講演会を行うことになつた。

(六) 本書の発刊。

本書の訳者である荒瀬　進博士は阪大医学部を卒業され、今は国立善通寺病院長をされている篤学の士である。氏の祖父荒瀬幾造氏は毛利藩の命により三田尻より長崎に留学し、ポムペ先生の優秀なる弟子となつて業を終えて故郷に帰り、医学校を建設された。この祖父の偉業とポムペ先生の学徳に深く感銘し、ついにオランダ語の独習を志され当初の目的を達せられてポムペ著「日本滞在五年」の医学校の報告に関する部分を完全に反訳された。しかも荒瀬氏は自ら日本駐在オランダ大使オットー・リユウヒリン氏を通じて、ここにポムペの著述の反訳出版の許可を得たのである。

ここにポムペ先生の数々の著述中でも代表的な本書の邦訳を、われわれの記念事業の一つとして出版することになつた。われわれはこの書によつて、百年前の日本最初の医学教育の実態や、日本最初のホスピタルを通しての長崎―いな日本国民の洋式医療に対する当時の史実を、手にとるように知得出来るのは読者と共に望外の喜びである。

他方、この出版によつてわれわれの企てた西洋医学教育発祥百年記念会として、真に好個の記念事業をさせていただいたことに会長として深甚なる感謝と敬意を捧げるものである。

昭和三十二年十一月一日

西洋医学教育発祥百年記念会長
長崎大学医学部百周年記念会長
長崎大学医学部長
北村　精一

長崎ことにその医学校に関する知見報告

ポムペ・ファン・メールデルフォールト 著
荒瀬 進 訳

内容

序文
本文
日本におけるオランダ海軍派遣団
二、三大名を訪問
私自身の業績
欧洲への私の帰国

序文

ポムペ・ファン・メールデルフォールト

日本はオランダと支那は別として、二百年以上に渉つて諸国との交際を絶つていた。然しながら、この国は今や、この鎖国主義の方針をやめて、広く諸外国との貿易に参加しなければならなくなつた。欧洲各国は、すでに十九世紀の初めから極東の諸国と交易して、お互いに年毎にそれぞれの国の繁栄を深めつゝある。支那は米国の西海岸、ことにカリフオルニヤと貿易して近来それも益々隆盛となつた。このように貿易が盛ん

になつたのは、全く英国商人や米国商人の忍耐深い取引によつて出来たものである。現今見られるような繁栄も、実にそこにあると解すべきものであろう。然し他方、これ等の商人の母国政府自体の後援によることも大きいと申すべきである。

このように世界各国が互いに交易するようになつてから、僅か三十年そこそこである——にも拘わらず、天の神の加護でもあるのか、短年月のうちにかくも隆盛を来した事は唯々驚く外ない。

大きいにも拘わらず人口の極めて密である欧洲の都会から、人々は土地を求めて支那に進み、沼地や荒れ果てた地を掘り起して、そこに居を構えざるを得なくなつたのであろう。確に香港・上海の居留地や欧化した各居留地を視るに、短日月にかくも生活が変つて来たかと不思議な位である。殊に上海には殿堂が沢山ある。そして数百、否、時には数千の大商船が各国の旗を掲げて、各地からそこに集つている。そしてそこの市場から欧洲や米国へ色々の産物を持ち去つていくのを見ることが出来る。

漢口（ハンカオ）—これはむしろ海辺から遠く離れて支那内地にあるが、四年前迄は広漠たる一帯の沼地に過ぎなかつた。それが今や香港や上海と覇を争うようになつた。芝罘（チーブー）・寧波（ニンポウ）・天津（テンシン）並びに二、三の他の植民地は、近来すばらしい繁華を来し、人口稠密な欧洲風な市街に変つて来たように見受けられる。今日となつては支那で活躍しているのは英国人や米国人ばかりではないようである。殆んどすべての西欧各国も、多数の代表者とその国民をそこに送つている。英国と米国は支那に阿片を盛んに販売しているが、どんなに考えてもこれは栄誉ではない。阿片は体格上にも精神上にも有毒である。このようにして支那で大儲けするようになつたのは、一八四二年締結の南京条約の結果である。条約によつて黄金狂が益々そこに集つて来たのであるが、更にお隣りの日本帝国にまで鵜の目、鷹の目をみはつてそこに利潤をむさぼろうとしたのは、蓋し当然であつて驚くに足らない。彼等は書物によつて、この日本にも支那と同じような産物、殊に茶と絹物があることを知つていた。彼等は又しても平和愛好者である日本人を、支那人と同じような阿

片吸引患者にしてしまおうとした。ところが逆に、出嶋のオランダ商館に夢物語のような貿易額を得さしむるようになつたのである。真に日本との通商関係を盛大にするには、個人を相手の微々たる闇取引であつては駄目である。近海航行の汽船は日に増し多くなつて、日本から便利に、又、巧みな取引で石炭を購入し得た。日蘭貿易に関する二、三権威者の著述を読むに、日本自身もかえつてこれによつて巨利を博したと云う。

極東が通商の門を開いてから、露国も英国も米国も、殊に熱心にこの好機を逃さじと貿易開発に邁進した。

最後に米国宣教師の業績が決して侮られないものである事を強調したい。神父等の奉仕に関する歴史的著述を読むと、日本ではすでに大凡二世紀前から、この奉仕事業が進められている。又、日本国民の宣教師に関する面白い話もある。殊にフランチエスコ・ザビエルに就いての話が此等の本に載つている。彼が現われると、日本人達は歓呼の声をあげて喜んだと云われている。

『それはわが愛する人達への福音となる』と云つて、合衆国も一八五二年に日本へ遠洋艦隊を派遣し、エム・シー・ペリーをその提督に任じた。蓋し、その意図は、日本をしてその門戸を開放せしめ、一般貿易と商人同志との取引をも許さすべきだと云うのである。にも拘わらずこの米国提督の日本訪問は大した成功をかち得なかつた。この事より前に一八四四年オランダ王故ウイルレム第二世陛下から、日本政府に親書を寄せられた事があつた。日本はいつまでも鎖国政策を続けるべきでなく、この古臭い国是を放棄すべき時が来たこと、西洋諸国と今少しく自由に交易すべきであると進言されたのである。然しこの条理を尽した陛下の勧告も馬の耳に風と受け流された。日本は依然としてその方針を改めなかつたのである。遂に米国はこの局面打開に猛進せざるを得ずとして意を決し、艦隊を日本沿岸に游戈させたのだ。最早一刻も待てぬと決断を促がしたのである。かくて、一八五四年に暫定的ながら日本の大君と北米合衆国との間に条約が結ばれたが、その際米国領事が下田に住居してよろしい事も決定した。後程、今一度この条約と、米国人の第一回入国に就いて詳報するが、兎に角こゝには取敢えずかくして古い日本国是が遂に改善された

ことを御知らせする次第である。

この決定が日本の各藩主にどのような影響を与えたか。又この米国側の要求に対し、どのような激しい反撃が起つたかである。詳しいことはこゝには略すが、唯一つこゝでお話したい。それは時の大君である源家慶が、米国と友好的な条約を結び、続いて配下に命じて一層具体的な取りきめをすることになつた二、三日後に殺された事を述べた丈でも這般の情況がお判りであろう。然もその犯人はとゞのつまりは保守派の党首であつた水戸藩公であつたのである。

最近の日本に関する二、三の書きものを読むに家慶の後継者である源家定も、一八五八年七月に殺されたらしい。それもオランダと米国が、日本とそれ〴〵新に条約を結んだ直後のことであつたと云う。

けれども私は此等の風説を確かな根拠を以つて否定したい。なぜならば源家定は一八五八年八月に確かに水腫病で薨去されたのだ。何分にも新条約締結直後のことであつたので、公も亦、暗殺されたのだろうとの流言が飛んだだけである。

旧制度の放棄は、それでは日本にどのような風を捲き起したであろうか。西洋諸国と日本との交流は日本人の生活様式にも一大変化を与えた。一歩々々前進するにつれ革新精神がまきおこつた。この革新と従来の保守との二つの相容れない相剋が、それ〴〵の方向に互いに深入りしていくのは蓋し已むを得まい。私としては、各藩公がこの革新を歓迎しないのは当然のことと思う。既に二百年以上も完全に鎖国していたのを、急に西欧諸国と交際しようと云うのだもの。

私は思う、今度新たに結ばれた条約の目的は暫くの時間をかけて、この国とこの国民を開発誘導しようと云うのであろうと。何れにしてもあのように美しく、又あのように平和であつたこの国が、今後数年間混迷と内乱と云う代償を支払わねばならぬのは、蓋し已むを得ないだろう。極東諸国のうちでも殊に日本の場合、西洋思想や洋風化が短兵

急に採り入れられようとするのなら尚更の事である。

日本の風物がかく一大変調を受けようとしている。否、現に確かに変調しつゝある。この際、オランダ政府も漫然と、これを傍観するわけにもまいらぬ。一八四六年以来オランダは日本政府に申し入れをして一般貿易と個人取引を断行したい旨の意志を表示した。一八五一年にはヤン・ヘンドリツク・ドンケル・クルチウス君を新たにオランダ領事に任じて日本へ派し、他に必要な指示と権力を与えたのである。この事によつて既往約二世紀間の永きに渉つて、日蘭両国間に積つていた不快な事柄を解消しようと試みたのである。たしかにこの有能な行政官によつて、其後続々と成績があがり、功績大なりしことは後程、読んで戴こうと思う。

ドンケル・クルチウス君は何はともあれ、日本人に『納得さす』と云う方針を採つた。君は兎にも角にも『日本人よ、自分の眼で洋風更新とは元来どんなものかをよく見よ』と云うのである。いかにこれが日本国民の開発に良い結果を与えるかを、高度な西洋文芸やその科学に就いてよく見て欲しいと云う方針である。ドンケル・クルチウスは、このような緩漫な開発方針では随分年月がかゝるとは思つたが、然し、それでも、沢山な大砲を抱えた軍艦を多数並べて見せるより良策と考えた。確かに軍艦は端的な効果を持つであろう。然しながら、そんな乱暴よりは、この温和な方策が適切であると考えたのである。確かにドンケル・クルチウスはペリー艦隊に決して負けるものではなかつた。その証拠に彼は早くも二、三年後には多くの新しい諒解事項を日本から獲得している。つゞいて日本も遂に他の西欧諸国に向つても、その門戸を等しく開放するに到つた。彼は間違いなく日本人の生活にうるおいを与え、その頃の日本国内に見られた流血沙汰も無意味な事だとさとらせたのである。よく考えてみるに、かつて度々みられたあの流血の内乱は今はなく、随つて幾千人もの人命を助けて二、三年後には、この国の得るところ大とならしめた。

ドンケル・クルチウス君は、オランダ政府に要請して、日本へ軍艦二、三隻を派遣させ、これを教材として、日本人に汽船運転に関する新知識を与えた。又つゞいて、そのような艦船を所有する方向へも導いたのである。兎に角、

先ず以つて、そのような船の運行方法を教えることにした。この提案を受けたオランダは、遂に意を決して汽船スンピングを日本政府に贈ることにし、同時に日本人に航海術を教える使命のオランダ王室海軍日本派遣団を、この船で日本へ送ることにした。

ドンケル・クルチウスは賢明にも、この贈物の代償として日本在留中のオランダ人に多数の特権を得ることを日本との交渉で成功した。例えば日本国民とオランダ人は一層自由に互いに取引出来ること、狩猟・魚釣り・遠乗りや、遠足の許しも諒解に達した。初めは単に汽船スンピングの実地運転方法を教える事であつたが、このことが更に引いては長崎に国立正則航海学校が創立される事となつた。そこで各藩からの優秀青年学徒に、欧式技術を習得させることにまで発展させた。

第一回オランダ派遣隊の隊長として当時の海軍第一級官中尉ヘイ・セー・セー・ペルス・レイケン（氏はその後海軍少将となり海軍大臣に栄進）がその任にあたつた。海軍第一級官中尉アー・アー・エス、フローベン、第二級官中尉セー・エグと管理部士官セー・ハー・ペー・ド・ヤンヘと、多くの海軍下士官達や水兵達が教育助手として参加した。この人達は日本のためには革新と開発との水先案内人であり、実に次代日本海軍軍人育成の礎石となつたのである。かくして教えを受けた日本の青年達は、欧風教養を身につけて人々から尊敬されるに到つた。非常な熱意を以つて、これ等日本人達は研学これつとめたので、これ以上知見を拡めるには最早こちらの手持ちが無くなつて仕舞つた程である。新生日本の改善は実にこの第一回海軍派遣団が、長崎でその機能を始めたその日から発足したと申してさしつかえない。

今から二年前、日本政府の招きで来朝した第一回派遣団の教育振りが、かくも好評を博したのでオランダ政府は、更に航海術教育を前進さすため第二回派遣を決定した。同時に、この隊に日本人に自然科学、医学と治療学を与えるべき軍医将校をも加えることになつた。第二回派遣団の監督は、時の第一級官中尉イエー・セー・リダー・ハイセン

フアン・カツチンデイケ（一八六一年三月以後海軍大臣に昇進せられたが一八六六年エス・ハーヘで惜しくも薨去）で、それに次の人々が参加した。

機関将校　ハー・ハルデス
第一級官中尉　ベー・デー・フアン・トロイエン
第二級官中尉　ヨンケル・ハー・オー・ウイヘルス
軍医将校・第二級官　ヨンケル・エー・エル・セー・ポムペ・フアン・メトルデルフオールト
管理将校・第三級官　セー・エー・ウンボフローベ
その他二、三の下士官と水兵達
計　三七名

この第二回派遣団は、一八五九年十一月一日に日本とお別れして帰国した。恰度その頃の日本は保守派が天下をとつていたが、彼等は日本臣民は何も外国の科学者陣によつて革新される必要はない、と云うのであつた。そのため、日本はオランダへ第三回派遣団の派遣を要請しなかつた。ところが間もなく革新党が再び天下を掌中にとりかえしたのである。日本の物のよく判つた人達は私に幾度も、今一度オランダ政府に日本青年の開発をお願いすべきであつたのに、保守派の妨害で遂に不成功に終つた、と残念がつていた。オランダ政府とても再び派遣団を送る気はもう無いだろうかとわれ〳〵に申すのであつた。オランダとしてもわれらオランダ人への、あれ程の反抗を見ては、何も喜んで今更需めに応ずる気は毛頭無い。あの保守派の不作法に対して、一般の非難は高かつた。それでも某国の如きはこのような空気の裡にも、一肌脱いで援助開発を試みたがうまくいかなかつた。唯、露国将校が函館で授業を試みていくらか成功したかの感があつたが、余り意味のあることでもなかつた。

オランダ将校の後援で長崎に建設された正則航海学校は、一八五九年以後はかくして遂に廃校となつた。この学校

は僅か四年間しか存続しなかつたが大変効果があつて、二、三百の教養ある青年がそこで授業をうけ、欧洲風に改善された。そこで授かつた教養は後に日本政府に大いに役立つたことは既に述べた。

一八五九年には日本人に対する私の医学教育課程は未だほんの序曲に過ぎなかつた。日本政府も、これからと云う事をよく知つていたので再三、講義続行を依頼した。そこで私は正規の医学課程をつゞけるため、一八六二年十一月一日まで長崎に留ることにした。その事に就いては別に詳しく書いてみたい。

一八五七年三月二十六日に第二回派遣団は母国オランダを出帆した。船は汽船ヤパン号であつた。この船は日本政府の需めにて建造されたもので、廻航司令は海軍中尉ハー・フアン・カツチンデイケであつた。九月二十一日長崎に到着したが、途中の寄港はリスボン・喜望峯・バタビヤとマニラであつた。

私の大凡五年間の日本滞在中、医師としての特殊な業務と、今度オランダと日本とが全く新しい観点から交際出来ることになつた二つのため、日本人と極めて親密に接触することが出来た。前任者が極めて窮屈な思いをしたのに反して私は大変楽に自由に、そして素晴しい事を学びとる事が出来た。

最近出版されたサー・アール・オールコツク著「大君の主都」と云う本の序文を読んでみた。氏は日本人に就いてものを書くことは大変むづかしい、否不可能に近いと云つている。その気持は私にも判る。氏は『今迄に観たことがあると云うが、日本人の本当の上流家庭に就いて何が判つたと云うのか』と書いている。然し私をして云わしめれば、私はそれを観たと断言することが出来る。私丈でなくオランダ海軍派遣団将校も、同じく観たと云える。私の仕事は臨床医師であり、それは大変特殊な性質のものでもある。病人と云うものは他人には秘密なことも、病室では医師にかくし立てすることは難しく、否むしろ不可能な事が多々あるものである。

この私の著述の目的は、今迄余り知られてなかつたこの国の事を、少しでも多く読者にお知らせしたい念願からである。なぜならば私が母国オランダに帰朝後、日本の事に就いて色々正確な知見を人々から求められるからである。

殊にこの国の最近の情勢に就いては、オランダでは殆んど知られてないにおいておや。

われらオランダ人の日本国民に対する不信と疑いは、ゆゝしい二つの問題である。ために実際問題として沢山な困難な事が今もなお両国間に山積している。従つてこの際われ〳〵は日本の種々な行政機構と、その国民性に就いて正確な知識を持つている必要がある。

病床では見栄も外聞も無くなり赤裸々になつているから、上に述べたように往診の医師に秘密を保つことは困難である。日本のそんな風な病床や、又病人の伏せている家庭や、はたまた死人の置いてある家で、私は色々の物事に触れた。時には使つている品物、作法、風習や諸々の珍しい事を見せて貰つた。その結果誠に特異な民俗であることが判つた。

他方、私は教師としても医師仲間や科学者連に沢山の友人を持つた。この仲間達から、この国の政庁、教会、産物施政方針を承知する事が多々であつた。一言にして申せば従来秘事とされていたことを、多数教わつたのである。

此等の特殊知見こそ、私のこの著述の内容である。この内容のうちには、既に今迄に他の著者によつて報告されたものもあろう。然し尚多数のことは、読者に全く耳新しいものと断ずる。他の著者の意見とは全然反対のものも、拙著のうちに再三あろう。それは然し私が長期に渉つて日本に滞在したことゝ、他の如何なる人よりも一層深く日本人と接触し得たためである。

日本に関する完全無欠な歴史書を読者諸子に供する事は本書のねらいではない。日本の時局がまだその結末を得るところまで安定していない。各人の感得と研究によつて求められるような最高且つ完全な著作の得られる日の来らんことこそ、読書子の唯一の念願である。

こゝに拙著を広く世間に発刊するにあたり、文中諸所に散見するであろう誤謬に対し、読者諸子の正当な判読と修改をお願いする次第である。且又批評家諸士にも左様な点に篤と御宥恕を乞い願うのである。

諺に曰く『意図だに良ければ、たとえ、その方法拙くともそは許さるべし』

ス・ハーヘにて一八六六年九月三十日

ポムペ・ファン・メールデルフオールト

本　文

日本におけるオランダ海軍派遣団

私は既に、長崎行の第二回オランダ王国海軍派遣団の特殊な事情に就いて二、三説明した。その説明のうちに何故にオランダが日本に海軍団を派遣しなければならなかつたかの余儀ない事情と、オランダ当局が熱心にこの機会を捉えて、素晴しい土産をオランダに持ち帰りたく大変あせつた事情をも、充分説明したつもりである。又、日本が新しい世界情勢を身につける上に、このオランダ海軍派遣団がいかに大きい影響を与えたかは、今までの私の記述を読んで貰えば多少とも納得して頂けると思う。オランダは心から日本を援助したいのである。又、日本皇国自身も教育と開発によつて、徐々ではあるが、立派な国に発展したい念願を持つていた。われ〳〵オランダ人も喜んで日本のこの希望を充してあげたいが、その為には唯単にこの国の従来の政策を誤破算にするだけでなく、更に進んでなるたけこの国の科学的水準を高める必要がある。それにはどうしても従前の行政機構を再編成してもかまわぬ事が、この上なく願わしい。前後二回のオランダから日本への派遣団の業績に就いて、こゝで再び繰り返し解説する煩には堪えられ

ぬ。諸君はよろしくリダー・ハイセン・フアン・カツチンデイケがオランダへ帰国後出版した「日本滞在日記抄」に就いて、その詳細を汲み取るべきである。

長崎海軍兵学校は一八五五年十一月から一八五九年十一月まで開設されていた。学校は海軍大尉ヘイ・セー・セー・ペルス・レイケンによつて設立され、後にそれが再編成されたものである。約二百名の日本青年、しかも主に裕福な家庭のものが、そこで教育を受けた。彼等の勉強振りは感心なもので、少しでも多くのものを知りたいと心掛けたので、その成果も格別見るべきものがあつた。いろ〳〵様々な海軍将校が輩出し、現に日本海軍の司令官となつて、今や何等外国の力を借らずとも、立派に航海し得るようになつた。このことは卒業生が未だかつて、問題とすべき失敗を惹き起していないのでも判る。

この海軍兵学校の最大の目的とするところは、私に云わすれば何も前途ある青年に、こまごました教育を与えるのではなく、彼等が四年間親しくオランダ海軍将校と交際して、完全無欠な一人前の教養を身につけるのがそのねらいである。彼等が日常聴くこと視ることを通じて、徐ろながらその判断力を向上させ、続いて急にはいかぬながらも、将来日本が独力でやつていこうとする精神を培うようにしたいのである。かくしてこそ日本青年の著しい発展と改善とが、期待される筈である。彼等青年は既に欧風化した。そして間もなく日本開化の中核となるまでに育成されたのである。かく教育が授けられて或者は江戸に、或者はその故郷に帰つて身につけた新知識を、政府や親戚や友人に頒ち与えた。更に高級な役所に於ても、総べてを改良と進歩に役立たせた。これ等生徒は早くも種々の任務に就いた。

或者は海軍に、或者は陸軍に入つて司令の地位に就いた。外務省の事務に当つたものもいる。専門学校の教授になつたものも二、三に止まらない。すべて任務こそ違つても各々の仕事に於て、素晴しい改善を与えぬものはない。私が頻りに説いた如く、オランダ海軍派遣団の偉大な業績とは即ちこれである。この功績は信じ難い程大きいものだ。然るに英国のサー・アール・オールコックや仏国のアール・リンドウの如き輩が、このような重大な功績を解せず、

これは単に時勢のしからしむるところだ、と報告している。全く腑に落ちぬ話である。これはいつもながらの、彼等の妬みである。何もオランダのみが日本に対し、殊勲第一とは申せぬというのだろう。そうではあるまいか。

我がオランダ海軍派遣団が近代日本の躍進に大いに寄与したことは、いかなる修交条約にも勝るとも劣るものでないという私の意見は、愈々牢固として抜けない。日本自身もこの事をよく承知していて、オランダに対し深く感謝している。

恰も一八五九年に到つて日本の保守派が再び頭をもたげて、事毎に横車を押すようになつたことは甚だ遺憾である。そのため遂に長崎海軍兵学校にまで累が及んで、先ずもつて教官を順次追放することを政府の方針とするに到つた。かくて最早、オランダ政府に向つて日本の開進と教育のため第三回派遣団の編成を日本から要請するというような事もなくなつた。後になつて日本の革新主義者が再び政権を担当するに及んで、このことを大変残念に思つたが時既に遅かつた。一八五九年十一月一日を期して、最後の派遣団がオランダ本国に向つて出発した。かくてとりかえしのつかぬ事となり果てた。

二・三 大名を訪問

諸大名がわれ〳〵オランダ将校に対し並々ならぬ関心をもつたことは、大名が親しくわれ〳〵を訪問してくれた事でも判る。これ等城主達は長崎に来て、われ〳〵の仲間に入り長時間遊んでいつた。時にはわれ〳〵を招いて御馳走してくれた。そんなことは、この国では未だかつてない事である。例えば薩摩や筑前の大名は、われ〳〵を招待した。既に日本政府もこのことを許可しているから、われ〳〵の藩を遊歴するようにと招くのである。そこで先ず第一に、薩摩藩主を訪問することにした。日本政府は、その所有にかゝわる一隻の蒸汽船を用意してくれた。そして時間の許す限り藩内を隈なく見物することを希望し、ついでに平戸と下関の遊行をもすますようにとの事であつた。

一八五八年夏のころ出帆して、平戸海峡に向つた。そして小さい田助湾に投錨したが田助では同名の村に宿をとつた。約二世紀半前に初めてオランダ人が入植した所に杖を曳いて、到るところで住民の人なつこいまなざしに接した。人々はわれ〳〵が滞在中、気持の良いようにと心を砕いていた。二、三日してわれ〳〵は下関に向つて出航した。この下関というところは日本本州に在つて、然も下関海峡に臨んでいる。こゝは日本でも指折りの極めて裕福で、且つ素晴しい所である。われ〳〵はお陰で気持良い散歩をすることが出来て仕合せだつた。愛くるしい市民にお目にかゝることが出来た。われ〳〵は二、三日下関に滞留した。二世紀以前に、わが国の長官が江戸へ参勤の途上宿つたという家に寝をとつたのである。宿の丸太柱や戸板に、これ等旅行者によつて傷つけられた落書の痕が今に沢山残つているが、或ものは早くも一世紀の昔のこととなつている。概してこの宿は快適で、宿の人達はわれ〳〵を気持よくするように骨折つてくれた。誰であつたか、われ〳〵一行の一人が出されたお茶にミルクがないと愚痴をこぼしたところ、すぐコップに一杯のミルクを容れてきて『今、女に搾らせたばかりの新鮮なお乳です』といつて、すゝめてくれた。われ〳〵は寧ろ、お茶にはミルクを入れない習慣なのだが、この良い気転を大変多としたのである。

日本政府はこの旅行にあたつて、われ〳〵が何かちよつとした土産物を買う時にも、銭を支払わなくてもよいという事であつた。下関は現在、大凡四万の人口をもつ市街で、人口は最近大いに殖えてきたという。商業の盛んな町である。下関の藩主（この藩は長門又は長州と呼ぶ）は、この町を距る極く僅かなところに住んでいる。そこは寧ろ、海に面していて長府と呼ばれている。われ〳〵は幾度か、そこかしこと散歩した。有名な神社仏閣にお参りした。そのうちの一つは日本史に有名であるが、今や見る影もなく荒廃に帰している。われ〳〵が町を歩いている時に、江戸へ上る太守肥後侯閣下に偶然出逢つた。われ〳〵は珍しくもこゝで初めて、大名行列なるものを拝見することになつた。その事は兼ね〳〵幾度も聞いていたが、それをまのあたりにする事は、なか〳〵難しいとも聞いていた。前駆と使丁・鎗持ち・鉄砲持ち・儀仗兵・刀剣持ち・旌持ち・数々な高官等、それに太守の行李や函を担つている下男等全行

列は約半哩に及び、この行列に参加する人々は総勢千人を超えている。太守自身は一つの輿に坐していた。そしてわれ〳〵を見つけて初め大変驚いたようであつたが、われ〳〵の敬礼に極めて丁寧に答えてくれた。

僅か数年後この町でオランダ国旗が辱しめを受けたが、そのためこの町は逆にわれ〳〵のためにひどく反撃を食わねばならぬ破目に陥るとは、この際夢にも思わぬ事だつた。即ち長門藩主の臣下のいろ〳〵な階級の人達が、われ〳〵の長崎兵学校に入学して教育をうけたが、その教育が今や逆に好ましからぬ仇となつて、われ〳〵に食つてかゝつたのだ。われ〳〵は下関を後に、薩摩の主都鹿児島さして九州に船を進めた。二十四時間後には一つの湾口に船を乗り入れた。小さいが誠によく繁昌している漁村、山川に投錨したのである。この湾に沿つて村がある。湾は丸く、その形から察するに、これは噴火山の火口であつたようである。何故なら湾はまんまるで、その中心は数尋に及ぶ水を湛えているのでも判る。湾は小さい。湾の東側と南側は大きい山々で取囲まれ、この山々は花崗岩と玄武岩から出来ている。一見極めて印象的であつた。こゝで数々の素晴しい噴火産物や各種の温泉や硫黄泉を見つけたことから推して、これ等は総べて幾世紀か昔に、こゝに怖しい火山の大爆発があつたことを物語つている。かれこれ一時間ばかりこの火口の周辺を歩いてみたが、青々した皺影・可憐掬すべき渓川の流れ・豪華この上ない渓谷があつた。一言で申せば、われ〳〵はいつの間にかエデンの花園にさまよつているかの感がした。山川町は優秀な馬匹が飼育されることで有名である。われ〳〵も二、三素敵な馬をみせて貰つた。今度私達が山川港に投錨した理由は、こゝで藩主松平薩摩守をお迎えして、われ等の乗艦をゆつくりと見物して貰うためであつた。又、それが藩主の私達への申し出でであつたのである。総べてはうまくいつた。君侯は殆んど終日、われ〳〵の艦にくつろがれた。これより前、君侯が姿を現わされるや、わが艦は皇礼砲を発射した（君侯は現皇后の尊父にあたらせ給うからである）。然るに、われ〳〵をいたく驚かせた事は侯のお召物の質素なことゝ、同じく従者のそれも簡素なことである。君侯は贅沢を忌み嫌われる。顔貌は一見誠に美男におわすが、然し又、他方威厳も備わつていた。私は侯の齢五十五才と推定したが、実は十才程

余計であつた。いずれにするも太守は、当時日本国の最も秀れた人物の一人であつた。君侯本来の威力を以てしても、且又その学識を以てしても、日本皇帝にも又時の政庁にも押しがきいて、明かに日本の一大改革者たり得ることは、万人の等しく認めるところであつた。惜しい哉、一八五九年八月のことゝ思うが、余りに早く薨去されたので充分その才能を伸し給うことが出来なかつた。確かな筋から聴くところでは侯は毒殺され給い、続いて幾週もたゝないうちに、その家族達も全部その跡を追いし由である。

艦内をざつと御覧いたゞいたので、太守と艦内の食堂で夕食を共にした。太守の註文によつて、決して高貴な客に供せられるような晩餐でなく、オランダ将校が日常食べているような物と寸分違わぬものが供せられた。われ〳〵の料理が太守のお気に召したようで、出されたものをみんな食べ給うた。侯にお伴していた大官達は侯の椅子の後に膝まずいていた。侯は試食毎にその皿を彼等に廻して、料理の出来栄えを何かと批評した。酒とビールも同様に試み給うた。藩侯の従者のうちには甚だ有能な人物がいて、矢継早に質問の雨を降らした。その質問たるや明かに前以て用意していて、われ〳〵の明答を期待していたものゝようであつた。ドクトル松木弘安は確かに理論科学に於ても実践に於ても、格別秀でた才能の持主であることがすぐ判つた。太守は夕暮近くなつて、われ〳〵に別れを告げた。その時、侯は自分の居城に来て二、三日ゆつくりするようにと申した。それこそ、われ〳〵の最も喜びとするところである。既に翌日、われ〳〵は鹿児島に向つて出航した。鹿児島では町当局によつて手厚い出迎えを受け、われ〳〵一行の上陸が促がされた。われ等は藩邸の一に宿をとつた。鹿児島は人口五十万の都会で、湾に面している。街の防衛は、すこぶる堅固であつた。さてこそ一八六三年に英国艦隊がそこを襲つた時、英国は手ごわい目に遭つた。そこには沢山な優れた城砦があつて、なかんずく二、三の砲には百五十ポンド砲の装備もある。専門の知識をもつて、国内製も外国製も共に備えてあつた。市民は実に頑健そのもので、とにかく第一に秩序と勤勉の風習がみられた。市外に在る工業のための工場を訪ねたが、これは藩主自身が設計したもので唯々驚きの外はない。こゝに展開する各種工業

の手広さもみた、色々の形態、いろ〳〵の配色のガラス瓶・ガラス板・そしてそこでは絶えず進歩改良のための実験が行われている。大きい炉のある熔鉱炉、これに連結する鋳造場、そこには信ぜられぬ程の重量の鉄鉱が投げこまれる。広大な鉄工所、磁器や陶器のための工場、大砲や銃器を鋳造するための特別分室、カノン砲鋳造場、鉄板製造場は、とにかく作業能率をあげている。海軍大尉フアン・トロイエンの語るところでは、これ等すべての装備は昔のリユーク砲兵工廠にその範をもとめていると（多分それは書物から学びとつたものらしい）。こゝで実大の蒸汽船の木製モデルが造られていたのは注目に価した。これに依つて鉄製に鋳込もうとするのである。ハルデス君は、この時これに関するいろ〳〵な忠言を与えたが、喜んで受け容れられた。この工場の意図するところは実験を幾度も繰り返しすることによつて最早外国に依存せず、独力でいけるという境地に達することにあつた。二千人以上が設営の中で、絶えず忙しく働いていた。こゝまで到達せしめた私の前任者ドクトル・イエイ・カー・フアン・デン・ブロックの功績は誠に大である。フアン・デン・ブロック閣下は工場に必要な装置を供給したが太守は、これを嘉納し給い又、これを感謝している旨を語つた。いろ〳〵のことがあつたが、中でも深くわれ〳〵を感動させたことがある。それはドクトル松木弘安が機械学教授フエルダムの助言以外さしたる援助もなく、然もよく設計し得た小さな蒸汽船のことである。これは小綺麗に作られた船で十二馬力の機関をもつている。機関装置に少し欠けるところがあつて、為に効率の三馬力は消失している。然し固い意志と忍耐とによつて、よくこゝまで達し得たことは感心に堪えない。ハルデス君は後日、この機関を長崎蒸汽機械工場に運んで良いものに組みかえた。われ等がこゝで見た総べてのものから、次のことを予言し得る。即ち、賢明な藩主の行政により藩内の資源を益々増産さすことが出来、これに加えるに熱心な技術上の研究が伴つて、藩の輝かしい前途は火を見るより明かな事である。且又、日本の国是が変更されて西欧諸国と自由に交易が出来るようになれば、この藩は日本皇国中、最も繁栄、最も強力なものとなるは間もないことである。この予言は既に着々と実現しつゝある。さるをこの名君が早くも他界され給いしとは、悲嘆これに過ぎるものはあ

るまい。然もその跡を追つて、その妻子までもすでに今は亡しとは。さる事情通の日本人の話によれば、これは毒殺であろうという事である。

鹿児島漫遊二、三日間に受けた歓待は素敵であつた。かくてわれ〳〵は、長崎へ帰つた。筑前藩主からも、数日間来遊を乞う旨の招待があつたので、一八五八年の暮にこれを実行に移した。日本軍艦に乗つて、筑前藩の主都である博多に向つて出発した。博多は長い橋で福岡と連結している。福岡は軍都でそこには太守の官邸があり、藩の元老もそこに住んでいる。

われ〳〵が碇泊所に着くと、すぐさま城門に歩を進めた、そこで二、三の高官にいとも重々しく出迎えられた。徐々に市中を通り抜けて、宿舎に入つた。宿舎は既に、われ〳〵の歓迎の為に用意万端が整つていた。鹿児島と同様に町内の人々が、われ〳〵を見んものと馳せ廻つていた。良く視るとこの地の人々の性情は、鹿児島の場合より遙かに善良のようであつた。薩摩隼人は大変戦争を好むといわれるばかりでなく、更に反乱癖があり血に飢えているとさえいわれている。これに反し筑前の人達は、誠に行儀正しく且つ親切である。千人に余る人々がわれ〳〵を見んものと馳せつけても一人の巡査がおれば、その指令ひとつで群集はすぐさま整頓される。

博多は工業の実に盛んな街で、有名な繊維工場・鉄瓶や鉄鍋のための広大な鋳造所と織物機械製作所がある。然し、こゝは鹿児島程は繁華でない。福岡は模範的な軍都の感を与える町である。広々とした大通りがあり、碁盤の目のように矩形に区劃されたところに、大変清潔な建築物がある。それは庭と壁で周囲を取り巻いて兵舎・倉庫・武器庫等の用に供している。両方の街の全人口は、合して約十万と見積られる。

丁寧な筑前藩公には既に長崎の出島で長時間お眼にかゝつた事があるが、藩公に現住地で何かと良くして貰つたので、実に快適な滞在であつた。上役達は命令によつて、われ〳〵を方々へ案内した。君公は専用の廐から、何時でも見事な馬をわれ〳〵にあてがつた。この街の周辺は誠に愛すべき景で、素晴しい広いまつすぐな道、美しい籔、よく

整つた原野がある。殊にうれしい事は町の人達が親切で、大変楽しい遠乗りをする事が出来たことである。藩主は郊外の箱崎に遊園地を持つている。そこの景色は実に、わが国のヘルデルランドによく似ている。箱崎で城主と一日中遊び暮した。何もかも総べて完全に準備してあつて、藩公の道楽とも申すべきものをわれ〳〵に見せんとて、兵士一中隊を演習させた。それは長崎でわれ〳〵から受けた教育が、果して身についているか否かを試すためでもあつた。その後で一時間以上に及んだが欧洲風の宴席があつた。

滞在の第三日は、更に愉快であつた。藩主は乗馬して太宰府まで乗りつけないかと提案した。太宰府は博多から四時間かゝる小さな町である。こゝには天満宮という名高い神社がある。城主の愛馬は優秀であつた。道は幅広く、且つゴルフ場のように平坦であつた。眼を遠くやれば素晴しく手のゆきとゞいた野原があり、又、水平線上に二、三の坂道も見える。わが眼の及ぶところ、景観は総べて魔法師の如く次々と面白く移りゆくのである。道路に添う二、三の村里を見よ。村々はわがオランダのそれより、寧ろ大きいようである。そして兎に角村人達は、われ〳〵オランダ人の騎馬行進を見んものと走りよつてきた。何れも友情溢れんばかりの笑をたゝえていた。若い娘達は他の諸々の地方と同じく少しも人見知りをせず、又はにかみもしない。太宰府では一の旗亭に馬を停めたが、そこには既にわれ〳〵を迎える準備がしてあつた。暫く食事に時間がかゝつたが、そのあとで天満宮にお詣りした。更に二、三の珍しい庭園に遊んだ。午後、日没にはまだ間のあるうちに帰路についた。然し最後のコースになると、沢山の提灯やたいまつで前途を照らしつゝ走つた。この照明は妙に、われ〳〵の役に立つた。

第五日に長崎へ帰るにあたり、先ず太守にお別れの挨拶をした。その時われ〳〵は太守から、大変珍らしい贈物を戴いた。一人々々に一匹ずつの鶴が贈られた。これは誠に栄誉至極のことである。私にはその上、尚一匹の山椒魚(Salamander)が加授された。こゝで私は鶴が贈答に用いられるというこの国の高貴なもてなしに就いて、少しばかり感想をつけ加えたい。日本ではお互いに城主は独占的に鶴を贈物として用いる。将軍すらも大名から鶴が贈られる

と、この上ない満悦としたものである。私達にこの鶴が贈られたことは、夢おろそかに出来ぬ事実なのである。オランダ将校は日本では大切にせられるばかりでなく、更に細かい点まで気を使つて貰つている。将軍からわれ〳〵が手ずから佩刀を戴くという事は、最早疑う余地のない光栄のしるしである。この事実を諸外国外交団は公的には無関心の態であるが、内心は妬みの目で見ているに違いない。

われ〳〵が鹿児島と博多を訪問したことは、両城主にとつても誠に有益なことであつた。君侯達は、われ〳〵から様々な知識を得た。この知見は夫々の工場の改良に役立ち、何をおいても砲兵工廠ではそうである。その要塞に関してはわが海軍将校から素敵な教授を得ている。沢山な質問、それは彼等にとつては甚だ緊要なことばかりなのだが、われ〳〵が長崎に帰つてから、それ〴〵太守に回答が寄せられている。然も、この回答こそ関係者にとつては設備の改良に役立つことこの上ないものばかりである。

肥前藩主もまた何時ものことながら、非常に沢山な用件をわれ〳〵にいゝつけた。しば〳〵長崎に出て来て、出島にも長時間要談をしている。時にはわれ〳〵と食事を共にした。この宴席で君侯はオランダ教育の大切なことを度々口にした。そういう時は侯はガラスコップに酒を満して、われ等の畏敬するオランダ皇帝陛下に対し、一献を捧げたてまつるのである。フアン・カツチンデイケ君はオランダ陛下に戴いた一献の答礼をするのであつた。更に徳川将軍家の健勝を祈る旨の祝杯が、こもごも取り交される。このような賀宴は、いつも長時間に渉る。そして終りはお互いに忌憚なく、この国の現状に就いて自由に話しあつて、日々眼に見えて来る大きい進歩に役立たせたのである。実のところ肥前藩主には、上に述べた両藩主ほど私には心安くない。彼は明かに人望を気にしている。けれども持つて生れた高慢を、うまく隠すことが出来ぬようだ。彼は自分の藩士達に好かれるというより、寧ろ怖れられている。

今までに書いた報告によつて、いかにオランダ海軍派遣団が、日本帝国の開発に少なからぬ好影響を与えたかお判りであろう。この上詳しく述べる必要は、あるまいと思う。読者諸子は、よろしく銘々に悟つて欲しい。諸外国外交

団が長崎に在つて馬で近郊を遠乗りすること・狩り・釣り等も勝手たるべしというのは、これ全くオランダ海軍派遣団に負うところ大なのである。確かに後になつて、これが一般に許されるに至つたのであるが、初め、即ち、われ〳〵が長崎へ着任した直後には、オランダ教師にのみ優先的に許されていた。それが後にすべての領事館外交団にも、等しく門戸が開かれたのである。

さて私は、こゝで更に筆をすゝめて、ハー・ハルデス君の事に関し、二・三特別なことを報告したい。ハー・ハルデス君はオランダ王室海軍の機械将校である。君に関する報告をすまして、私自身の業績に就いて述べさせて貰う。海軍派遣団の関係した教育に関する詳細は、こゝには繰りかえすまい。宜しく今一度フアン・カッチンデイケの「日本滞在日記抄」を読み直されたい。

既に以前から、オランダ政府は長崎では機械技術に関する限り、いかように情況が変つてもハー・ハルデス君に一切を委せるより他に方法がない事をよく承知していた。蓋し彼は、そのように優れた人物であつた。どのような事態が起ろうとも、彼の前には困難もなければ不可能もない。彼は何事も即刻、明朗な創意を以てこれを実行に移す。彼は長崎に於いて独力よく事業を完成させ、あらゆる技術家を驚かせたのである。工場に於てハルデスがなした仕事を、ことごとくこゝに報告することは私には不可能である。私は、それ程の充分な技能を持ち合わさない。強いてそれをすれば、却つて打ち壊すばかりである。彼は三年間に沼地を化して蒸気事業と工業の為の工場と化した。この二つの工場は喜望峰から東では、これに匹敵するものといえば、唯スラバヤに於けるもの位である。然もハルデス君は、他人の助けを一つも借りていない。そこにはナスミス製蒸汽槌が動いており、そこには十二の大鍛冶場があつて鉄鉱が忙しく錬えられており、そこでは何時でも鋳物を作ることが出来、そこでは旋盤と窄錐を蒸汽力で廻転させることが出来、そこでは重い蒸気機械の部品、いやそれどころか新式の蒸汽罐を作製することすら出来る。一言でいえば、彼は沼地を乾かす否や直ちに千本の杭を地平に巧みに打ち込む事から初めて、遂に総べてを完成させたのであ

る。然も私が申した如く、何等他人の助力もなしに。何故なら彼の助手は役に立つというよりは、寧ろ邪魔になるのであつた。私は後程に沢山の技術家とこの工場を訪ねたが、このような立派な設営がまたとあろうかと驚くの外なかつた。そして、これぞ誠の巨人の偉業と宣言せざるを得なかつた。いやしくも航海をもつ国々で、長崎の此の工場に絶大な恩恵を蒙らざるものはあるまい。

この工場で蒸汽船は必要に応じ、総べて修理出来る。そしてそれまでは、その為に欧洲まで引きかえさねばならなかつた多くの船が、こゝで僅かな週間で完全に補修出来る。ハルデス君は尚、この外に技術家連盟を結成して、彼等のために理論的又は実践的教育を授けた。かくて、こゝで教えられた連中によつて日本の蒸汽船界が更に発展を続け得た。工場が略々完成に近ずいた時に、貿易用の埠頭を作る計画を起した（上陸又は寄港用として）。そこに諸船舶が横ずけになり、石炭の積込みも又、船舶の修理も大いに楽になつた。六尋の水深にするには、湾内にその為にどうしてもざつと二百から三百隻の小艇をかり集めなければならない。このような面倒極まる工事にも、ハルデスが手をつけた月余に渉つて、彼は潜水函に長時間身をかゞめて仕事した。このようにして海の深さを測るため重い測鉛を使用したり、或は埠頭のための礎石を次々と沈下整頓した。長崎蒸汽機械工場の隣りに、貯炭場がある。そこには千噸の石炭がいつも貯蔵されている。それをめがけて沢山の蒸汽船が、港に集つて来た。積荷はすべてこゝから支那へ向けて発送され、日本産石炭の価格は支那に在る英国炭に支払う価格の僅か三分の一ですむ。ために支那海を航行する汽船は、日本から石炭を購入する。ハルデスは第二回海軍派遣団が一八五九年に帰国の際も尚、長崎に踏み止まつて彼の事業を続けた。そしてやつと一八六一年に、この地を去つた。それも彼が手をつけた仕事が、そこに未完成で後をひくという懸念がなくなつてからのことだ。果して彼が去つた後にもオランダが日本の為に尽した蒸汽機械事業の燦然たる業績は、いく久しく讃えられた。

一八五七年から時移り一八六〇年に至る間は、日本には実に慶賀すべき進歩躍進の跡が見られた。それは長崎に於

けるわれ〳〵の生活様式にまで、甚大な影響を与える程であつた。条約に依つて貿易のため三つの港湾（長崎・兵庫・箱館）が開かれ、世界各国から少なからぬ外人が、長崎さして集まつて来た。日々新たに貿易商社が出来、おびたゞしい商店が立ち並んだ。湾の東南にある大浦には小さい市街が出来て、そこに欧洲人が居宅や倉庫を建てた。欧洲との通信は支那を経て届けられ、僅か六十日すれば母国からの新聞が手に入る。新しく来朝した外人のうちには優秀な青年もいて、彼等の生涯をこの日本に賭けているのであつた。これ等の人々によつて、共同生活は遙かに快適となつた。かくして早くも長崎というわれ〳〵の居留地は、人の知るいろ〳〵の居留地のうちでも最も気持の良いものの一つとなつた。支那から日本への観光客が、続々とやつて来た。しば〳〵団体をなしてやつて来た。外人同志で宴会を催したり、外人クラブ茶会の結成に努力した。茶会には軍艦から軍楽隊の派遣を願つて、興を添えた事も度々であつた。わがオランダ領事館は、そんな外人宴会には卒先してお世話した。時には気の合つた貴顕紳士と共に山の頂や長崎から時余の距離にある溪谷に遊んで、そこに四十人から五十人テーブルの酒席を設けた。食卓には数々の贅沢品を山と盛つて、わが身の異境に在るを忘れさせた程である。このような園遊会の催しは、長崎では殊の外賞讃を博した何故なら、皆々随分忙しい思いをしているので、このような気晴しは実際必要なのである。

長崎市内外の人々は、寧ろだん〳〵とその親切さを失つて来た。われ〳〵はかつては日本人の礼儀深いことを聞かされていたが、彼等日本人は今は、わざと不都合を働いたり、或は面倒臭がつたりする。然しながら私はこれは確かに、その非は欧洲人自身に在ると思う。なぜならば頻りにマドロス連や他の船員達が町の近郷近辺をうろつき廻つて、その都度必ずしも人家に対し行儀が良いとはいえなかつたからである。ために日本人達は、欧洲人に嫌気がさしてきたのである。何故というに、日本住民の或者は、しば〳〵与えられた侮辱と意地意な応対に復讐し始めたのでも判る。かくの如き復讐は、市内至るところでみられた。欧洲人が初めて日本の岸辺に船を辿り着けた時は、人々は丁寧で愛想がよかつた。それが間もなく日本人にいわすれば、欧洲人は来て貰うより寧ろ去つて欲しいという有様にな

つた。更に数ケ月経つと、外人の事なら明かに嫌悪の情を抱くに至つた。私は、こゝで敢えていう。大抵のことは日本人側が正しかつたと、うべなる哉。リンドウも『日本人の反感は、その非はこちら側にあつて、もうわれ〳〵はこの事実を蔽い隠すわけにまいらぬ』と申している。こゝにも俗にいうように『因果はめぐる』の諺がその儘あてはまる。

私自身の業績

さて私はこれから、私自身の日本に於ける業績に就いて、二、三特別なことを申し述べたい。大抵のことは私は他人の言に委す主義である。然しながら最近の日本に関する記載のうちで、わざと私の事を省いているに至つては我慢出来ない。少くとも英国のオールコック、仏国のリンドウや、その他の輩が私の日本においての業績を殊更に握りつぶし、止むを得ない細かい点になると一、二言及してお茶をにごしている。これは全く合点のいかないことだ。又、私に対する他人からの兎角の批評は、この際少しも気にしてないことを述べておく。

さて、私の日本での業績を良い気になつてだら〳〵と長たらしく繰り返し述べるのもいかがであろう。世の常からいえば、私の仕事は当然のことで、何も事珍しく書きたてる程のものでないかも知れぬ。然しながら私の日本滞在は寧ろ総べて、これ世界科学史に関することのみで、従つて私はこれを報告する義務があるとさえ思つている。

リダー・ハイセン・フアン・カツチンデイケ君が一八五六年に日本へ職員を同伴して行こうとした時に、私は医師としてお伴することになつた。カツチンデイケ君は当時の海軍大臣に私の任用を要請したところ、異議なしとのことであつた。かくて、われ〳〵は一八五七年八月にバタビヤに到着し、長官は蘭領印度政府を動かして、同時に私を政庁医官兼日本に於ける自然科学調査員を依嘱することにした。この任務はフアン・デン・ブロックの解任のまゝ空席になつていたからである。私の永年に及ぶ経歴に於いて常に陰に陽に特別に私に好意を寄せ給いしフアン・カツチン

デイケ君を回想し、又その恩誼を思えば万感胸に迫るものがある。私が初めて身を海軍に投じてこのかた、君は幾度か私の用心棒となり、私のため身心を労され給いしこと一再でなかつた。日本に来てからも私の仕事に気を使い給い、更に君がオランダに帰朝して遂に海軍省長官に栄進してからも、私への友愛は少しも変らなかつた。君の余りに早い逝去は、私にとつても誠に断腸の思いである。君を追想する度に今も尚、絶えせぬ亡き人への思慕の情が切である。

われ〳〵は一八五七年三月に、ロッテルダムを船出した。船は日本の発注によつてオランダで建造された、ヤパンという快速艇である。艦の廻航指揮は海軍大尉フアン・カッチンデイケが務めた。三月二十六日にフアン・ヘルフーツルイス港を離れた。船路は誠に快適で、それが又何よりも愉快なことで、われ〳〵はリスボン・喜望峰・バタビヤ・マニラに寄港した。九月廿一日暮色迫る頃、日本の長崎の高鉾島近くに錨を投じた。この島は長崎湾の入口にある小島である。われ〳〵はこゝでおびたゞしい艀船に取巻かれたが、なかんずく一隻はことに近寄つてきてつゞいて港務官連が甲板に昇つてわれ〳〵の入国査証の提示を求めた。リスボン出航後、早くも七十六日の航海をすましたことになる。然しこれは余りに永すぎる船旅と嘆くにもあたるまい。翌日、碇泊所に近ずいて気罐の火を落し、瓊の浦の麗わしい景色に恍惚となつた。次々と目前に現われる風景を眺めるに、かくも素晴しいものがこの世にまたとあろうかと、一同目を見張つて喜んだ。人間には、いかなる運命がつきまとうか判つたものでない。されば暫くの間、この地で自分の命をすりへらすような事があつても、それを苦にし給うな。否それどころか私は、はる〴〵この東の果にさすらい来て、この上ない美しい地に暮すことに限りない喜びすら感ずる。碇泊所に着いてから、とかく急いで出島を訪問した。そこでオランダ領事館員達を、親しくまのあたりにした。この人達を救護すべく、われ〳〵は遠くやつて来たのである。これ等館員達と何の心おきなく話すことが出来た。又、それでこそあなどり難いこの小島に、嬉しい暮しを送ることが出来ようというものだ。第二日には日本側の首脳訪問や貨物の陸揚げや、はた又、われ〳〵のため

に設けられた住居を整理することに暮れてしまつた。私の用に供せられた家は植物園の中にあつて、湾内を見おろす眺めは素晴しかつた。家は広く、その各室は誠に心地がよい。初めの週間は何もすることがなかつた。ゆつくりと総べてのものを良きように整頓することが出来た。十一月になるとペルス・リーケン派遣団は故国へ帰り、われ〳〵は業務に就いた。

オランダ医官が出島に来て日本医師の教育にたずさわつたのは、既に幾年も以前のことからである。フオン・シーボルト君、モーニケ君、フアン・デン・ブロック君等は随分骨折つて日本人の教育に当つた。この国の鎖国方針は、すこぶるこの教官連の邪魔をした。そして日本人は日本政庁の許可がなければ、誰も出島に来ることが出来なかつた。それも常に、立会人や通訳を同伴することに限られていた。然し長崎のオランダ医官諸子のいつわらぬ名声は、まさに国中に鳴りひゞいている事と、医官等の素晴しい臨床技能は到底他の同業諸子とは較べものにならないという事は、日本政庁とてもどうすることも出来なかつた。この事実があつてこそ日本は、オランダ政府に軍医官の派遣を要請したのである。又、それが唯一の理由でもあつた。遂にはオランダ政府自身の方から定期的に、協賛的に進んで教育を引きうけようという事になつた。面倒な国語の違いがあろう等とは、誰も気がつかぬ事であつた。唯、特殊な病理学と治療学とを一通り教えれば事足りると思つていた。

二、三の生徒が江戸から出島に派遣された。その中に皇帝侍医の息、松本良順が居た。この人に生徒諸君の調整と規律に関する限り、監督を委ねた。彼と交わるにつれ、彼は総べての人の尊敬を受けていることが判つた。且つ日本人の並はずれた才気から推して、われ〳〵が想像するより遙かに大きい望みを彼等が抱いているのに気がついた。私は早くも彼等日本人生徒の基礎的知識が、零であることを知つた。その上、彼等はオランダ医書から極めてあいまいな概念しか得てない事も判つた。そこで私は喜んで依嘱された教課を開講することにしたが、そこで条件をつけた。それは相当思い切つた方法をとること、又型の如く基礎医学と臨床医学の二つの学課に分けてその課目全部を教える

ことを申し伝えた。私は同時に彼等に、次のことをはつきりと印象ずけた。即ち、この事たるや実に面倒極まることであることと、そのためには私自身が暫く勉強しなければならぬということを。

松本君は、この私の見解をすぐに諒解した。そして、その交渉を早くも長崎政庁とまとめてくれた。そして私のこの要求通りの教育方針を行うための完全な自由が認められた。且又、同時に政庁首脳部は、私に協力を惜しまないことをも約束した。江戸出身の生徒の外に各地から、長崎へ向つて多人数やつて来た。同時に私の講義を聴くため、随分沢山な医師諸君も市街から集まつた。これ等の諸君は十一月初頭に私の前に現われた。然し私は、この時多数のものは既に余りに歳をとりすぎていて彼等には余りに耳新しい学問でもあり、且、難解なものをイロハから初めても到底ものになるまいと思つた。にも拘わらず、彼等は勉強したいという。とにかく一八五七年十一月十二日に医学校を開いた。最初私は十二名の生徒等が腰掛けているのをまのあたりにした。そこで早くも難義なことにぶつかつた。即ち、われ〳〵はお互いに話すことが判らぬ。はてな？　生徒は私にオランダ語はしつかり勉強しているという。然しながらそれは文法だけのことで、私と話すことも私のいうことも、かいもく判らぬ。一人の通訳が、私の話す一話々々を通訳しなければならない。然もこの通訳もすこぶる不充分なもののように見受けられる。なぜなら、こゝでわれ〳〵が取扱う学問は、生徒にも通訳にも全く耳新しく、且つ奇異なものばかりであつたから。

そこで私は商船学校の某教官に、出来るだけ語学教育をして貰うようにすゝめてみた。この教官は派遣団に参加して来た人で、かつてオランダで助教授を勤めたことのある人である。他方、私自身はなるたけ早く日本語を習得することに最善を尽した、このようにして私が初め思つたより案外早く、お互いの言うことが理解し得るようになつたのは喜ばしい限りであつた。何故と申せば僅々二、三ケ月後には私が大変ゆつくりと又はつきりと話せば、生徒の方は充分楽に私のいうことが判るようになつた。一方、私は私としてまるで長崎弁丸だしではあるが、少しは日本語で話せるようになつた。

私は講義目録を作つた。そしてその際、一つ一つ手際よくまとめあげることに留意した。物理学・化学・繃帯学・屍体解剖学・組織学・健康な人間の理学総論とその各論（生理学）・病理学総論と治療学・調剤学・内科治療並びに手術的治療法・眼科治療法、従つて時間に余裕があれば法医学と医学的社会政策まで講義した。私は実のところ白状するが唯単にこのような事柄の列挙だけでも参つてしまうのに、生徒にとつては多くの学科のうちには名前すら初耳のものがあろうから定めし愉快のことではあるまい。生徒等はわれ等の学ばんとするものが、そんなに勉強を要するものかと考えてみたこともないであろう。それでもある生徒達は、急いでこれ等の学課を次々に教えて欲しいと注文した。然し私は必要なものから課程を進めようと決心した。そして少しも割引すまいと心に誓つた。その結果、二、三の生徒は根負けして匙を投げて欠席した。それは主に歳老いた諸君であつて、私はこれ等の人に特に酌量して教育を授けなかつたからである。松本君はよくこの理を諒解してくれて、その代り更に多数の新しい若々しい生徒を連れて来た。越前・武蔵・伊勢・筑前・長門・摂津・薩摩・肥前・神崎・豊後・肥後・佐渡の諸藩主は、その若人をこの学校へ留学させた。間もなく私の膝下の生徒数は大凡四十人に及んだ。私はこゝで申しあげるが、これ等諸生の日々示す熱心振りは唯々驚くばかりであつた。彼等は判らぬ事は決してその儘にしておかなかつた。寸暇もないまで自習するので、夜分に及ぶのであつた。それも自身の知識を増したいばかりである。講義中は彼等は実に注意深く、そして一層つき込んで説明を求めるのが常であつた。事柄を徹底的に呑み込みたいからであつた。教師にとつては、誰しも同じことを三度も四度も繰り返さねばならぬとは余り愉快なことでない。私は実に、こゝに白状するが大変な忍耐がいつたわけである。然し生徒にとつては教えられる事総べてが全く新鮮な事であり、又、珍奇な事であつた。その故に私も、総べてが充分納得ゆくまで質問せよとすゝめた。これ等の若い日本医学徒に教授するうちに、私は彼等が内科或は外科に関する何等の有要な知識を持つてない事が判つた。一方彼等は日々学問に突き進んでゆくばかりであつた。然しながら彼等の或者は、寧ろいくらか既に完成しているやにも見えた。このような生徒は悪気なくまじめ

に、病人の手当とは一体どんなにするものか早く教えて欲しいという。或は『先生手術とはどんなにするものか早く教えて欲しい』等と注文したことは、再三ではなかつた。或は、あらゆる熱病患者の治療を教えて欲しいともいう。私はこれ等総べての申し出を拒絶した。生徒が教課を几帳面に受けようというのなら私も誠に喜ばしいが、下手な事は許さないつもりである。然し生徒もだん〳〵と、この私の考えの己むを得ない事に賛成してきた。それからは授業も大いにはかどつてきた。さりとて生徒達が余り極端に勉強し過ぎないように、日々、講義は四時間に止め、毎朝二時間午後二時間にした。そこで講義後の復習にも、時間に充分余裕が出来た。全教課に渉つて私は簡単なメモを作つた。このメモを授業の土台に用い、更にこのメモを読みあげることによつて一層明瞭に生徒は理解した。メモの内容を塗板に書くと、通訳は端からこれを和訳し、この和訳を生徒が筆記するという順である。各学科に渉つて多数のメモが生徒の手許に出来て、その大多数には飜訳の書き込みもついている。これは私にとつては最良の方法のように思えるが、このメモを作るのは随分面倒なものであつた。生徒が用うべき教科書というものは無い。たとえあつても生徒には難解で読んでも判るまい。かえつて混乱に陥るだけのことである。後になつて当局は、私のメモを出島印刷所で発刊しては如何、との要望があつた。そこで試みに薬物学に関するものを印刷した。この印刷所では主として日本人の印刷工を煩わさねばならなかつたが、随分高価なものになり、その上仕事も悠長でこの印刷だけでも殆んど一年を要した。そこで私は続いてやる気がしなくなつた。然し後に学問の良く出来た人達にすゝめて、私の教科書を日本語に訳してそれを出版するようにした。それが一部実現した。それで私が今までなめた講義準備の苦労は、大いに酬いられる事になつた。何故というに、これ等の本がよく売れて生徒が大いにそれを利用すればよいのである。私も亦、それを希望する。内科学と外科学の授業は単に理論的では不徹底である。更にこれにつけ加うべきものが沢山ある。そこで私は屢々政庁に対し、新しい設備が徐々であつても是非必要なことをその都度進言しておいた。

日本政庁が何時も変らず私に協力するというかつての約束をよく守つてくれたことゝ、出来るだけ私を支持してく

れたことは、私も認めざるを得ない。成る程、私が政庁に所望したことは、時には随分苛酷なものもあつたろう。然し次のようなちよつと変に聞えることにも政庁は果して許可してくれたであろうか。例えば、解剖学実習に供すべき屍体の提供・模型屍体の購入・病院の新築等である。これ等の要求が今すぐ実現出来るとは、然し私は夢にも思わなかつた。唯私が要望したこれ等の事は、この上なく必要であることを、政庁役人に理解させただけのことである。従つて所願成就するまでは随分暇どつたが、一度これを実現さすと決定してからは政庁の人達も、充分私を援助してくれたことを申しておきたい。唯、長崎政庁の一人である高橋美作守という人が政庁に在勤の間（一八六一年から一八六二年まで）は、私に辛くあたつただけであつた。幸にも彼は外国領事団からしば〳〵その不信任案が持ち出された。なぜなら彼は欧洲人に関することはなんでも直ちに反対の態度をとつたからである。遂に彼は余儀なく江戸へ召還されるに至つた。

私は政庁の人、岡部駿河守に何時も支持され、彼は一八五八年から一八六一年まで奉職していた。彼こそ誠の文化人で、とにかく立派な働きものの日本人で、それが母国日本の発展と繁栄になることであれば、なんでも大胆にやつた。日本はこの行政長官に最大の恩誼がある。彼の三年間の公正な行政は、長崎にとつても一の勝利であつた。沢山の話にならぬ悪弊は彼によつて打破された。

さて私は最も大切なことを簡単に報告しよう。それは私の教育業務に関することである。

物理学に関する講義には医学生の外に二、三の砲術家や技術家もこれに合流した。化学の時も同様であつた。理学実験用の器具は備えてなかつた。あつても問題にならぬものであつた。そこで私は絵や掛図を使つてすべてを解説するより外に方法がなかつた。幸なことに私はオランダから沢山の良い書籍を持つて来ていた。又、出島オランダ図書館にこれ等の学問に関する参考書を見つけた。その書物には見事な詳しい附図が載つていた。日本人は附図で物を習うことに非常に慣れている。又、この民族は何かこれは面白いと思うと、すぐにそれを絵にする癖がある。幸にも実

験をしてこれを理論的に説明するためには無くてはならぬ化学用器械を、二、三長崎で入手することが出来た。そして若い者もこの学科には大変熱心で、常に真面目に出席した。かくて私は彼等の進歩が目に見えることに大変満足した。無くてもすまされるところから、面倒な数学はすべて止めて、なるたけ実践的な学課を沢山教えることにした。日本人は数学は不得手で、沢山の数字やこんがらかつた方程式を見ると、すぐに意気沮喪する。

この二つの学課の講義終了後、鉱物学と鉱山開発に関する課外講義を初めた。日本には私の見た範囲では、非常に沢山な鉱物がある。殊に諸大名の切なる願いは、何か新しい岩石又は金属を見つけるとそれは何であるかと知りたいことである。さりとて私にはそうたやすくこれは何々であると断定することは出来なかつた。第一、私自身これに関する深く突き込んだ知識があるわけでもなかつた。己むなく彼等の需めに応じて物ずきな連中に毎週二回、夜間私の宅に来て貰つた。幸いにも自然科学・地質学・鉱物学・鉱山開発等に関する秀れた図書が見つかつた。従つて、それには見事な附図も附録として載つていた。かくてこれ等の文献から最も緊要な知見を汲みとることも出来た。他方、生徒には彼等の出身地からいろ〳〵な鉱石や金属を持参させ、その一部をすそ分けして一つのコレクションを作つた。それは国立レイデン博物館の要望があつたからだ。これ等のため大凡八ケ月は忙しい思いをしたが、然し良い事をなし遂げたと思つた。恰度その頃から概して本職の方の用事が多くなつたので、私は最早そんなことに拘わつている暇もなくなつた。

人々よ思つても見よ。ざつと三千万の人口を持つ一つの国に於いて、未だ内科学と外科学が充分に発達していないために、甚だ重篤な病人が沢山あつて、然もそれ等病人の大多数が余りうまくない治療を受けてひどく重態を続けていることを。

出島にいるオランダ医官は、古くから常々日本人医師には指南番であつた。然し鎖国主義スパイ嫌疑という古い保守主義のため、これ等日本人医師をいつも不徹底な方法でしか助けることが出来なかつた。普通では出島のオランダ

医官は病人を診察することも出来ない。唯書き付けや通訳を介して口頭で助言するだけのことであつた。ドクトル・モーニツケは既にこの欠点だらけの行政処置に就いて、一切を告白した事があつた。私もこれは何とか改めねばならないと思つたが、果して事情は変つてきた。道しるべは打ち立てられた。これに就いて人々は私を必要とした。私自身日本人の福祉のため、どんな苦労をしてもこの際骨を折つてこれを解決しようという気になつた。又それは私にとつても、この上ない願望でもあつた。

既に来朝以来、病める日本人が私の往診を求めた。けれどもそれは甚だ面倒なことで、殆んど不可能な相談であつた。病人は先ず区長・市長と政庁当局の許可を必要とした。更に病家を訪ねる時は、いつも立会人と通訳を同伴しなければならなかつた。この形式は実に煩雑極まることで、私にとつては侮辱でもあつた。私はこれはどうしても改めねばならぬと、堅く心に誓つた。そこで私自身政庁に出頭して、次のことを長官の面前で申し開きした。即ち私は医術をもつて人を救助したい事、それは真に民衆の福祉に添う所以である事、そしてそれは私には随分苦労であり苦行である事を述べた。更にそれでも私は総べての病人を誰彼の区別なく全部無料で取扱いたい事（後にその理由を述べるから、その時読者に判る筈）卒直に政庁は私を支持されたい事、且又馬鹿げた条件をつけて私の仕事の邪魔をしない事をも要望した。

政策上私を信頼出来ないとか、又、日本人との交際は危険だというのなら、さてこそそれをはつきりと遠慮なく申して欲しい。そのような嫌疑のもとでは私は教育を続けることも出来ない。寧ろ本国へ帰るにしかずである。オランダ将校としての私の地位からしても、また教育家としても、完全な信用の与えられる事を要求するのは、私の当然な権利である。その返事は遂に来た。即ち、そんなに気を悪くする程のことでもないという。なぜなら嫌疑なぞ飛んでもない。唯古い日本の法律が未だに変更されていないので、かゝる形式がとられるのであると、そこで私は暫時黙つて経過をみることにした。然るに後に私は我慢出来なくなつたので、積極的にそんな事では私は一人の病人も診察し

ない、と断言した。そこで当局は、江戸へ早速お伺いを立てることにした（これは当局が事を決しかねる時に常に用いる常用語であつたが）。

かくするうちに私は、松本君に次のことを得心させた。即ち、生徒が私と一緒に患者を処置する。それは生徒にとつても、甚だ利益を与える事になるからである。これによつて、生徒を臨床的に教授し得るのである。松本君は又、君自身としても今までの古い習慣を破つてみようとした。続いて人々は、早くも自由に私の往診を請い願うようになつたが、常の如く立会人が側にいなければならなかつた。これを私は好まぬ。そも〳〵役人等は、それをして何にしようというのだ？　病人に対する私の質問と、病人の私への答を筆記して江戸へ送るということは、さすがにしなくなつた。若し、それをしたら随分変なコレクションが出来たであろうに。私の申し出た要求を私は頑強に固執したので、遂に政庁から許可が来た。即ち病人は総べて松本君の処へ先ずやつて来る。然る後にこの病人を、今までのような深入りした干渉なしに私と一緒に処理してよろしいこと。私はこの譲歩を得たことを誠に嬉しく思つた。然し私は日本でなし遂げたいことが、まだ〳〵沢山あつた。まだ私は、難渋の序の口に来たばかりであつた。然しながら間もなく、多数の患者が救護をうけに来た。但し常に比較的地位の高い役人が多くて、比較的貧しい庶民階級からは一人も来なかつた。この事は勿論、私には気がついていた。これを私は調べてみた。そしてやつと判つた。私の救護を受けるのは上流社会、ことに役人の特権かのように思われていたのである。そこで私は当然尋ねてみなければならなくなつた。『何の権限で私に相談もなく、この事を決定し得たか』と。それに対する答は、唯、私が小さな家や納屋にばかり往診するのは体面上よくないから、という事だけであつた。総べて社会の上流に属する生徒等も、同じような偏見を持つているのに気がついた。従つて、これを改善するには随分手間どつた。医師そのものに区別がある筈はない事、同じく病人にも総べて貧富、上下の差別は無いという道理を、殊に江戸出身の生徒すらも理解し得なかつた。その事を私が明らさまにいうと、彼等の答は『欧州ではさようかも知れぬが、日本ではそうはまいらぬ。それなら何

故に現に日本の医師に、いろ〳〵な階級と位階があるのか』

私は何も日本くんだりまで間違つた風習を手助けに来たのでない、といつてやつた。確かに日本には未だ知られていないいろ〳〵な事情をも伝導したいたいために、オランダから来たのであると。その後も随分苦心したが幸いに、この問題を解決することが出来た。遂に全民衆に面倒な手続なしに、随意に私の救護が受けられ、且つどんな位階の人も無料で診療が受けられる事を公告させた。その結果、富めるものも貧しいものも、簡単な手続をふんでやつて来た。随分貧しい者も最早何の怖れもなく、私を往診に招くことが出来た。それはまた一つの社会通念ともなつた。その上私思うにこれは又、我がオランダ政府の目的とするところであると、何故ならば政府が、私に専ら俸給を支給しているのは、確かに何も僅かな出島のオランダ役人のみを助けるためではないからである。ドンケル・クルチユス君は国立オランダ貯蔵庫から必要な薬品を、支払う能力のない病人には誰にも無料で与える権限を私に与えた。当時の日本にはまだ欧洲の薬品が極めて不足で、大部分の人は全くこれを入手する事も出来なかつた。ためにオランダ領事は必要とあらば薬品を目的に添うように心よく寄附した。往診の時は自分は常に二、三の生徒を同伴した。そして患者への処置を筆記させた。後には生徒もだん〳〵と進歩したので、生徒に直接病人を取扱わさせ、自分はそれを監督するに止めた。この方法は大いに効果があつた。又、間もなく一般からは、われわれの医術に一層深い信頼を寄せてきた。他方生徒自身もこの方法に満足して漢方医術より遙かに良い方法だという。然し私自身にとつてはそのために立ちどころに随分忙しくなつた。なぜなら大凡六万の人口を有するこの長崎の町では、随分の病人が出てくる事がしば〳〵であるからである。その上、続いて近辺から多数の患者がやつて来た。日本本州からも私の治療を受けに来たので、長崎学校の名は徐々に日本全土に響いた。随分遠方の藩から、しば〳〵文書で質問してきたので、それには手紙で返答しなければならなかつた。人は、その人の仕事を規則正しく分割してやつてゆけば、充分効果を挙げることが出来るというのは本当のことだが、それにしてもわれ〳〵には時間が余りに短かくて困ることが、間もなく判つた。

一八五八年七月にアメリカ軍鑑ミシシッピー号が支那から、コレラ病を日本に伝播させた。一八二二年以後、日本にはこの怖るべき病気は見られなかつたのである。多人数が犠牲となつて倒れた。住民はこの災難には全く落胆してしまつた。且つ、その原因はこの国を外人に解放したからだとして、われ〳〵に対する感情は極端に険悪となつた。われ〳〵外人を敵視してきた。私はこの疾病を駆逐するため百方予防策を講じて、時の政庁に種々衛生法規を立案させた。又政庁に命じて強力にこれが実行を徹底させた（こんな時にこそ専制主義の価値がある）。医師諸君にはコレラ病の本態と、その処置を知らせ、勿論、私自身も出来るだけ手助けした。かくて私自身には、面白くない日々が続いた。今や全く私の立場は、かつてのように唯、医師であれば良いというような、人から羨しがられる身分でなくなつた。人口六万に及ぶ程の長崎の町では、尚更である。即ち誰でも病気になると、医師の救護をほしがる。然し私の身体は一つしかない。従つて、一時に二ヶ所に往診というわけには参らぬ。それは暑い夏の半ばの事だつた。寒暖計は華氏八八—九二度を示し、その上、長崎というところは山嶽地帯であり、道々に沢山の段々があるので馬車を駆けることは出来ぬ相談であつた。総べては馬、又は駕籠によらねばならなかつた。私自身も間もなく、この重い病気に罹つた。そして一瞬でも私が必要だという矢先に、私は危く倒れようとするところであつた。この事は非常に私を心痛させた。然しながら私に各方面から深い友情が寄せられ、尚又、限りない情愛の程も示された、出島にいる欧洲の友人達・政庁の人々、我が教え子達、そして又多数の日本人達は心をこめて私を看護しようとし、救護しようとした。この事によつて私はこの民族のためいささか尽した事、又感謝されているという事の証拠を得たわけである。十三日後には再び私は駕籠に乗つて仕事を初める事が出来たが、充分以前のように身体が恢復していなかつた。そのうち然し私の体力も蘇つた。十月の末頃この流行病は終息した。害毒は北東に向つて駆逐され、全国に拡がつた。千人を算える犠牲者が野辺へと送られた。私は小さなメモを日本語に訳して、これを印刷に附した。その中に本病の特異な点が総べて記載してある。この小著は全国にゆき渉つた。この巻の第一八二頁に、私は日本政庁に病院建策の必要な事

を建言したと皆様にお話した。かくすれば病人を規則正しく看病することも出来、私自身もその病床で研究することが出来る。これは勿論、大変な事業である。日本にはまだ一の病院、育児院或はこの種の一、二の施設もない。建築とその装備には随分な費用が要るものである。それに殊に面倒なことがあるのに私は以前から気がついていた。その最も難しい点は、一欧洲人の指図のもとに、日本に一つの公共施設を建てるという概念である。又してもここにドンケル・クルチウス君の例の世慣れた世話上手を煩わすこととなつた。閣下が一八五八年に江戸へ出発されるにあたり、江戸大政庁に提出する覚え書をことずけ、同時に私は長崎政庁に差し出すべきその複写をとつていた。この書類に病院建設が実地修練に必要なこと、あらゆる熱誠をこめて病院建設の緊急なこと、解剖実習のための屍体の提供、図書室の設置、化学実験室と外科手術室（外科手術器械の蒐集）の必要なことを力説した。ドンケル・クルチウスはこの覚書を帝国議会に諒解を求め、又私の計画を完成さすことに労をいとわなかつた。間もなく私の主旨はよく諒解され、願望は完全に実現されるであろうと。それでも私達は尚、安心とはいえなかつた。何故といえば、日本ではこのような事はしば〳〵聴かされる言葉である。後には決して実行に移されないのである。そこで私はくたびれもせず、このなされた言質を完了して貰うよう動きつづけた。この際二、三の勢力ある生徒が熱心に側面から私を助けてくれ、一八五九年に江戸から実際に病院を建ててよいという承認がとどいた。とやかくしてプランを立て、これを海軍大尉フアン・トロイエンという誠に秀でた設計家に頼んで紙に製図した。われ〳〵は建築に慣れている専門家と協議がまとまり、暫くの間、日本人達に建築を続行さすことにした。然しその間にも私は講義室に行き還りの途中、暫くの間でものぞいて監督の目をゆるめなかつた。

物理学と化学の講義は終つた。その上、鉱物学と鉱山開発に関する短かい教程も、繃帯学に就いての授業すらも終つた。この最後の学課は生徒達に大変感興を添えた。それは何よりも私が総べての繃帯を手にとつて教えたためでもあつた。糊ずけ繃帯、ギブス繃帯、このギブス繃帯は勿論まだ全然知られていない事で、人目を惹いた。そのために

私は沢山な繃帯材料を持つていたが、後にはこの病院に保管させた。繃帯学は寧ろ実地習練上大切なことで、治療医学に対する楽しさを起さすに格別好都合であつた。又そのことは極めて必要なことだつた。なぜならここでよく考えて貰いたい。徒らに基礎的な理論的な教育にのみ走り過ぎて、医学とは難しい学問なりという観念を人々に抱かせているが、このようにすれば本来の医療は左程のものでないと充分納得さすことができる。

次に人体の解剖を始めようとの試みである。これに就いては新たに異議がおこつた。困つたことになつた。今やどれ程私が辛抱強いかの試金石が与えられた。屍体を実物教育に提供しては如何なるものか、との試案なのである。図書や図譜はオランダから、私が充分に持参した。然しこれだけでは系統解剖学を教えるには不充分である。人間の体格構造に関し、正確な又純粋な概念を得るには、どうしても「観察」しなければならぬ（moet men zien）さなくば知識は常に欠如し勝ちである。

確かに私は巴里から、既に一つの人体模型を運んで来た。然しどんなにそれが立派に出来ていても、又どんなにそれが一人前の解剖学者にとつて習つた事の復習に役立つものであつても、これのみで解剖学を覚えるには充分といえない。私はこの事に関して、政庁としば〳〵協議した。他方松本君の江戸政庁への勢力を利用して、熱心にこれに当つた。けれども政庁とても一般住民に対しては、大胆なことは出来なかつた。一般の人は屍体がどのように丁寧に処置されるかを知らず、唯、日本人屍体が（野蛮な）一欧洲人に提供され、それが教習に用いられるという事が面白くないのだ。私は今までに苦労して教授した。そして授業に際し、度々解剖学を理想的に授業出来なかつたのは、私の罪でないことも注意しておいた。遂に江戸から指令が来た。場合によつては、刑死に処せられたものの屍体を用いてよいと。そしてこの事は一八五九年九月に初めて行われた。政庁は確かに民衆を怖れていた。死刑が牢獄の中で施行された。屍体は地外の湾内に突出している岩礁の近くに運ばれた。そこには既に私の目的に添うべく、納屋が用意してあつた。朝八時に私は、その方さして出発した。到着すると兵士が全部で百五十人程警備についているのに気がつ

いた。従つて入口には番をする上役がいて、これを守つていた。この光景を見た瞬間、私はこれは私をおどして、この私の計画を中止させようとする考えだと直感した。然しそれはその人達の失策であつた。なぜなら私は、仕事をあきらめる気は毛頭なかつた。とにかく今や第一歩は成就した。一八五九年九月九日、私は四十五人の医師諸君と一人の女医の面前で、第一回屍体公開示説を行つた。二十四時間内に計二回屍体解剖をしなければならなかつた。一刻も無駄な暇はなかつた。朝早くから暮闇せまるまで。この度が最後の屍体解剖となるかも知れないので、なるたけこれを有効に利用しなければならなかつた。さて私が働いている建物の近くで、何か人騒ぎが起つたようだ。然し日本人当局者は、次のようにこの人達に説き聞かせた。『見られるように受刑者の屍体は死後医学生の教授に用いられた。そして、それによつて同時に人々のためになる事をした。屍体は普通の刑死者のようにこつそりと監獄の墓地に埋められるのでなく、政庁の費用で別の所に埋められ、然もその時和尚が立会うであろう』と。埋葬の時、死刑執行人は決してその場に立会わせなかつた。これは民衆を満足さすことが出来た。私自身はどうであつたかと申せば、噂されたような民衆の興奮も受けなかつた。然も私は近く馬で出島へ帰る道々、常の如く町内の人々の敬礼を受ける外に、何の異常にも遭わなかつた。間もなく私は第二の屍体、第三の屍体を入手することが出来た。こんなわけで私は実際、大変な躍進を遂げることが出来た。解剖学教育は続いて行われた。その進歩は目覚しいものがあつた。土肥峻造君の如きは自身秀れた解剖学者になつてオランダへ帰る頃、彼は既に一つの「解剖学入門」なる著述の出版に忙しかつた。

健康人の総論的並びに各論的理学（生理学）と治療学総論並びに治療学各論については、医師でない本文の読者諸子には格別興味ないこと故、ここには省略する。これ等の学科は常によく研究され、生徒等も熱心に勉めた。眼に見える進歩の跡に私は満足した。生徒達は薬物学に関する私の実習課程に、再びことの外熱心になつた。それはこの学問は多分に、実用的であつたからだ。同時に新しい生徒、殊に開業医の中から聴講生が現われた。それは薬剤の使用

法、構造並びに毒性に就いて総べて詳細に説明を試みた事と、その上諸種の疾病を列挙して、それに使用する薬剤に就いても一つ〳〵懇切な注意を与えたことが、彼等に役立つたのであろう。

人々は役に立つ謂わば「虎の巻」（Pons asinorum）を作るべく一生懸命であつた。彼等が聴くものは、大抵耳新しいものである。殊に毒薬に就いてはそうであつて、彼等が以前使つていた毒薬は、大変瑣細なものに過ぎない。ために或る毒薬はその類似治療薬（Homoiopathie）で間に合わすという有様であつた。毒薬がかくの如く僅かしか用いられぬという理由は、寧ろその値段が莫大な事に帰すべきであつた。然し今や日々、改善されつつある。一八六二年の長崎での薬品は、平均して欧洲のその価格より二十パーセント位高くなつている。

以上のような講義が終ると再び、この臨時の聴講生は姿を消した。私の気持としてはそんな事は許されぬことであるが、然し彼等は先ず歳老いていることや、留守をあけることの出来ない開業医などの理由で己むを得ぬことであつた。こんな事は厳正なるべき科学的意義からいえば感心した話ではなかつたかも知れぬが、これ等の諸君には然し何物かを恵み与えた事になろう。

これに続いて、人間の健康を保つ学問（衛生学）を教えた。この学問は初めのうちは、余り喜ばれなかつた。一般の人達は気候・食物・飲料品・衣服・住宅・休養と運動等に就いて、多くを学ぶことの大切であることを意識しない。それよりも急いで医術そのものの方を仕上げたかつたのだ。然し私が臨床で特に衛生法規の緊要なことを度々説いたことゝ、兎に角コレラ病蔓延の時衛生法規を解説したので、だん〳〵とこの学問の大切な事を理解するようになつた。それからは生徒も人類を苦しめている疾病の大部分が衛生学の規則と進歩に就いて怠慢である事が、その原因であることを悟つた。時々私は生徒を連れて市中を散歩し、悪臭を放つ溝、汚物の山や塵の積つた所を見せて、これ等のものが人類の衛生上怖るべき害であることを説いた。そこで生徒等はその後は自ら進んで、これ等有害物を除去することに尽力した。私は誠にわれとわが心のうちに、日本人はいろ〳〵の事に随分長足の進歩を遂げたものかなと思

つた。翻つてわがオランダ本国は如何にや。そこには未だに多くの家庭や町内に、不潔と有害が満ち〳〵ている。この国には泥池・臭い溝・掃除しない暗渠・汚穢の谷などが、すこぶる有害なことを知らない程の無学の者は一人もいない筈である。にも拘らず誰もこれを取り除けようとしない。沢山の人々がうよ〳〵している我がオランダ国の裏町、結局は少しでも生き永らえようとするのに、彼等の生活には大切なものが抜けている。要するに文明国といわれるわが母国でも、同じように今より更に衛生学の知識に注意が払われて然るべきであろう。

特殊疾患と治療学はかくするうちにも教育はどんどん進んだ。そして再び生徒の数が急に殖えてきた。生徒諸君は次々に各種疾患の症状を列挙して、それ〴〵の必要な処方を教えて戴きたいという。生徒の一部は基礎学課の方をすつかり怠け、又失望して最早私について来なくなつた。彼等の知らない事柄に就いて沢山教えたが、講義が難しい、よく理解出来ないと難癖をつけて、これ等新入生の大半は早くも姿を消してしまつた。けれどもそれは、全く彼等の誤りである。私はこれに対し、充分忠告した。即ち、総べての学課は全体としては一連の関係、即ち環をなしていて、一として欠落してはならぬ事を幾度も説明した。『講義が規定通りに順序よく終了し、学課がよく呑み込まれた暁に初めて君達が希望する項点、即ち疾病の処置、続いて欧洲医学の諸法則をわが物にする事が出来ると。今までの日本式や支那式の教育は今こそ川にでも流してしまえだ』と述べた。

病理解剖学は各疾患毎に、その都度分劃して教えた。私の考えかたは病理解剖学を、それのみ独立したものとして、即ち孤立したものとするより、この学問に限り個々分劃してその度ごとに教える方が良策と思つたからである。

さて話の順序として、こゝで何故私が日本に医学を教えに来たかの理由を、説明するがよろしかろう。

古くから、この日本では医師の地位は尊いものであつた。然しその医師の地位又は階級に依つて、収入はいろ〳〵であつた。医師には医師・外科医と歯科医があつて、又それ〴〵に二、三の階級があつた。これ等を区分する何等の国家試験もなく、国家は各人の臨床の上手、下手を証明する何等の方策も採つてない。ために各人が勝手に唯我独尊

であつた。若い人は先輩から教育をうけて、それが何時の間にやら習いとなるのである。

帝・将軍と大名は、然し医術と治療法に大変関心を持つていた。彼等は大いに医学研究を奨励して、宮廷には多数の医官が絶えず在勤した。又、何れも大変な勢力を振うのが常であつた。これ等の高級医官は、唯単に医師としての職務を実行するばかりでなく、だん〳〵と総べての科学的又は技術的問題への助言者となつた。又熱心に勤める人には仕事は更に拡大するばかりであつた。このようにして日本では、これ等医師諸君がその君侯に限りない権勢を得ることは、決して珍しいことでない。

周知の如く薩摩藩主は近年その藩の発展がドクトル松木弘安に負うところ極めて大である。その松木は実は医師であるドクトル八木に助言されていたのである。

将軍家には二種類の階級の医官がいる。第一級は将軍自身が任命し、将軍家職員のうちでも幹部に属する。この医官は特に許可がなければ、将軍家に奉仕する人以外の病人を診療することは出来ない。彼の収入は年約七千—八千フロランである。一部は米、一部は現金で支払われた。その人数は不定であるが、大体四人である。彼等は普通頭を剃つている。それが習わしである。同時に将軍家の行政のうち、科学的部門を管理する義務もあつた。

第二級のものは将軍に依つて任命されるが、将軍家直接の所属ではない。これ等の人は病体を取扱うばかりでなく恰度オランダの衛生技官（唯、彼等はずつとより多くの俸給を貰つているのが異る点である）に良く似ている仕事を兼務している。大凡四千フロランの収入があつて、一部は米、一部は現金である（日本の科学技官は現金の方を好む）。これ等の諸君は平時その専門とするところを診療するが、戦時は陸軍に配属して野戦に従軍する。又、彼等は将軍家又はその政庁の企画する科学的協議会にも参加する。この第二級に属する医官の人数は不定である。彼等も多くは頭を剃つているようである。これ等両階級の人達は大変尊敬をうけ、又、尠からぬ勢力を持つている。勿論旗本として二本の刀を腰にさす権利をもつていて、彼等の召使いにも帯刀を許されている。社会に於ても彼等の学問的地位は極めて高

く、同じような一般の医師諸君とは同日の談でない。

これ等将軍家医官諸君の他に、尚一つの団体がある。即ち開業医である。これ等の医師は任官の必要はない。又、開業届を出す必要もない。唯好むところに従つて独立して業を営むだけのことだ。国からは何の所得も貰わないで民衆から金銭を頂戴するだけである。そして社会的には、わがオランダ国に於ける医師よりも遙かに地位が低い。そんなわけで日本では、今もつてわれ〳〵の如き軍医将校の教育を受けることを大変喜ぶのである。そこで私は随分骨折つて、欧洲の医師界の事情を説き聞かせた。欧洲では民間医師も日常の診療技術に於ては軍医と少しも上下ないという事、又、われ〳〵大学教授の任命も普通の医師から採用されるという事を説いたが、誰も判つてくれない。骨の髄まで泌みこんだ偏見を改めさすことは、さて〳〵難しいものである。然し日本人達が多少とも欧風化してゆくにつれこの事は徐々に判つてくれよう。日本政庁とても、まだ〳〵大いに軍隊的性格のものを重宝に思つていて、欧洲から医師を招くにあたつては、第一の条件として常に軍医将校をと申すのである。

日本の民間の医師は頭を剃つていない。即ち頭髪を長く伸ばしている。ために他の一般社会人と区別がつく、なぜなら人も知る如く一般の日本人は、その頭髪を半分剃つているからだ。彼等民間の開業医達は唯一本の刀を腰にしていて、同時に代診を随伴している。彼等は格別高い栄誉も持たず、その地位とても人の羨やむ程のものでない。彼の仕事は苦しく、その生計は質素である。これと同じような制約と同じような事情にあるのが、第一級・第二級官許外科医である。その人数は少く、給料も低い。これ等の外科医は民間開業医より更に地位が低い。民間医師はこの第一級・第二級外科医を合した力を持つていると思えばよい。

各藩の医師諸君は、その藩々でも殆んど今述べたものと同じ等級に別れている。第一級と第二級のものは有資格者として二本の刀を腰にしているが、民間開業医は一本である。これ等の第一級・第二級医師諸君は、各藩主から誠に結構な報酬をうけている。且、重責に就いている。各藩ではお抱えの医師は前に書いた将軍家抱えの医官よりも尚一

層重く任用され、総じて科学的部門の任にも服している。

日本の医術は従来いかように発達してきたかといえば、それはかなり程度の高いものであつた。医学書はオランダ語で書いてあり、一世紀半前から江戸に医学校があつた。そこで勉強していた。この学校から日本語に訳した医学抄本が沢山出ている。然し概念的には遅れていて、又大切な事が沢山書き漏してある。今日まではこの日本では、規則正しい医学教育は行われていない。それでもジャワを除く他の諸々の東洋国の医学研究振りより、遙かに程度が高いことは確かである。然し残念にも基礎医学は殆んどなつてない。

ざつと申せば日本の疾病治療法には三つの流義がある。本来の日本流。それは親から子に知見が受け渡されるという方法である。そして〃和方医者〃と呼ばれている。次に〃漢方〃。そのために江戸に一つの学校があつて、多年世間から甚だ高く評価されている。第三に〃蘭方〃。これは江戸にあるオランダ医学校で教育が行われた。最後の二つは〃漢方医〃と〃蘭方医〃と呼ばれ、他と区別されている。この国の治療法には明かに妙なことが沢山あつて、こゝに披露したいが、医学専門書でないこの私の著述には、不適当であろう。これ等のことに就いては私が以前に印度支那から発刊の「医学時報」一八五九年、第六十巻第六十一巻に沢山紹介しておいた。唯こゝには簡単に日本人のモグサ、鍼と入浴の事に少し触れてみたい。

〃モグサ〃或は〃燃える円柱〃これは草の葉とその芯と、時にはその草の皮から出来ていて、その草はモグサ(Artemisia Vulgaris)という。草は乾かして粉末にする。その後に賦形剤の助けを借りて練り固め、細い小さな円柱にしあげる。人は医師に相談することなく、独断でこれを用いる。人々は現に罹つている病気に用いるだけでなく、病に罹らぬ予防の意にも用いている。この意味から多数の日本人は年に一回又は二回(春と秋)二、三の灸をすえる。すえるところは、こゝが変だなと思う所にあちこちとやつている。私はこの珍しい所作をまのあたりに見た。人々はいかにも楽しんで、このかなり痛い手術を受けている。彼等の考えは総べてわれ〳〵の身体の中には有毒な物

質があつて、然もそれは瓦斯体であると。灸をすえるとそれが身体の表面に出て、遂に体外に放散されるというのである。日本人の身体に灸をすえた痕が沢山あるのを、しば〳〵見受ける。お灸をすえる最もありふれた所は、脊柱の両側に添い一列又は二列である。更に坐骨神経の走行に一致してすえたり、胴体・耳後・その外に顳の上にまですえる。女達も亦、沢山の場所にこれを施している。大抵の世帯には艾を持つている。恰度オランダで各家庭に重酒石酸加里（Cremor tartari）又は茴香水の一瓶を常備していて、一寸でも不快な時は直ちにこれを服用するのと同じことである。身体の内部のひどい疼痛には、時々同じ場所に続いて三回から四回灸をすえるので、遂に危険な事態を惹き起すことすらある。多分この日本人の灸は外科手術と同じく、初めは支那から伝来したものであろう。けれども支那人は日本人程、灸を行わない。

〃針〃或は〃針術〃。この手術は灸よりももつと奇妙なものである。これも身体の中の有害な瓦斯が蓄つている、という考えから出発している。針をこの瓦斯体の中に突き刺して、体外へつかみ出さねばならぬというのである。針は大層細いもので、入念に出来上つていて大抵は銀製である。稀には金製又は鉄製のこともあるが尖端は鋭くとがつている。長さは四—八寸で柄は骨又は象牙である。針は曲りながら奥深く刺し込まれるが、日本の針師がいかにも落着いてこの道具を使つているところを視ると、唯々驚く外ない。針師は先ず触診して、どこに破るべき瓦斯があるかを探しあてゝ、更に打診音でどの位瓦斯が蓄つているかを定める。その後に針をのぞみ通りの深さに刺し込む。私は或る大変有名な針師を知つているが、その人は日本国中を飛び歩いて、信じ難い事に見えるが長引いた病気を癒した。病気のある所を見つけると、すぐに彼は合計六—九本の針を刺し込む。そして型の如く定まつた図形に針を入れるが、彼は誠に注意深くこれを行つている。この図形は例えば、次のようなものである。

この針師は私に、今迄に未だ一度も一本の血管も一本の神経も傷つけたことがないと、はつきりと申していた。又、妙な作用がおこりつゝありという組織を、どんな所でも今すぐ眼の前で言いあてることが出来る、ともいつていた。これこそ多年の経験で初めて出来ることであろう。私は彼の手技にならつて、これをやつてみる勇気は全くない。これは時には稀ながら、傷害や不幸を惹きおこすだろう。彼等が不充分な解剖学の知識でもつて、こんな事をやつているかと思うと、一層不思議でたまらぬ。

入浴。日本では皮膚の手入れは健康上最も大切なものと一般に考えている。大変尤もなことである。これとても入浴によつて有害な瓦斯が放散されるという考えから来ている。皮膚の穴からこの瓦斯が排出される。穴がつまると、当然この排出が困難になる、というのである。お産のあと、すぐに嬰児は入浴させられる。そして一週間に三回、温い湯に浴する。後に児が年とるにつれ、一層頻繁に入浴する。日本人の身体は段々にこれに慣れてきて、三度の食事より熱したお湯に入る方がよいという事になつている。この入浴の弊害は、矢張り過度なことである。即ち入浴しすぎること、又、余りに熱湯に入ることである。その上お湯に余りに長時間つかつている。その温度は時に手がつけられぬ程の高温である。摂氏五十度はありふれた温度で、或はそれ以上である。風呂から出てきたところを見ると、ゆでた蝦のようである。湯の中に十五分から三十分入つている。そして常に頭を濡らさないように気をつけている。そんなわけで弊害は愈々倍加するのである。言いたくないが、こんな入浴は大変身体を弱らせ皮膚を余りに過敏にし、且又、日々頭脳を昏迷に陥らす原因となる。入浴中に人が急死するのは珍しくない。裕福な不自由のない日本人は、毎日入浴する。各家庭には目的に適したように、よく出来ている大きい桶が備えてある。その桶の水を十—十五分で

温める。一家族でいえば第一に主人、次に夫人又は婦人が入浴する。更に子供達、遂に召使達であるが、総べて同一の湯でこれを取り変えない。その際石鹸は用いない。否用いても余程稀なことである。いくらか貧しい庶民家庭では湯桶を持つているのは極めて稀である。こんな家庭では湯桶を唯、病気になつた時にだけ用いて、木炭で沸かしている。普段は公衆の銭湯に入浴する。普通どの町々にも銭湯がある。そこには浴槽が満々と温水を湛えていて二、三銭の銅貨を投ずれば、誰でも入浴出来る。この銭湯では誠に奇怪なことが沢山見られる。浴場には男女や子供等が一緒に同時に同じ浴槽に入る。そして誰も少しも、その不行儀を非難するものはない。それどころかはつきり申せば、入浴者は男女の性別等少しも気にしていないようだ。浴槽は唯一つだけで、せい〴〵一日に二回湯を取り変えるに過ぎない。そこで入浴するものは、おくれないように気をつけねばならぬ。何故ならばおくれて行くと湯を新しく取り変えて貰うか、或は綺麗にして貰わねば胸が悪くて入れぬからである。尚、飛んでもない奇抜なことがある。一風呂あびた後に男でも女でも、よく素裸になつて町に出てゆき、近くではあろうが自分の家の方へブラ〳〵歩くことである。全身は赫く照れて見え、身体から湯気を立てゝいる。けれども誰もこれに気をとめているような気配もない。

けれども近年は宵になると長崎では最早、この異様な景は見かけにくゝなつた。欧洲人もいつまでも日本人の所作を、ひいきめで見るとは限らないので、これに遠慮したのであろうといわれる。即ち以前のように、裸で歩き廻らなくなつた。然し私に言わせれば、この変化は決して外人に対する恐縮のためでもなんでもないと。われ〳〵の眼には、この東洋人の風習や癖のうちには、特に卑猥なものがあつて低級に見える。

冷水浴は余り行われていない、唯、非常に暑い日中、然も八月と九月に時たまに、湾内や河川で水浴をしているのを見かける位である。日本には温泉や冷泉が沢山ある。その事は既にお話した通りである。殊に沢山の硫黄温泉があつて、なかんずく九州の嬉野は大変名高い。この温泉は一般に知られているように皮膚病によく効くので、そのような病人が随分沢山集つて来る。その外に炭酸泉・鉄泉・ヨヂウム含有泉とアルカリ含有泉もある。私は依頼されて鉱

泉の水質の定性試験をしば〳〵行つたが、その報告は別のところに指示しておいた。化学研究に詳しいドクトル・ハラタマは、われ〳〵に協力して大変秀れた知見を与えてくれた。

けれども日本人達は既に確かに古くからこれ等温泉の効能を知つていて、いろ〳〵な病気に対するそれ〴〵の温泉の適応をも、よく承知して入泉していた。

こんな事を詳しく述べると、それは医療のことばかりに横道することになり、私の申したい教育問題から逸脱する。けれどもこれ等の報告は、同時に日本人の国民性に少しばかり、触れることにもなり、敢えて隠す必要もあるまい。

さて本論にもどつて、生徒達のことを述べよう。生徒には続いて特殊疾患の病理学と治療学を理論的に教授した。この学課は実際に病人を、診察したり処置したりすることが最も大切である。さもなければ実際に一人の役に立つ医師をも、養成することは出来ない。それも更に次々と新しい学説を採用して、教育しなければ駄目である。病人は私達の病院に沢山集まつてきた。日本人に対する私の診断と治療は拡まつたので、私は自分のすきな症例を、その中から撰り分けることが出来た。余り沢山病人がよつてきたので、どれもこれも実際に、私が手を下して診療することが出来かねた。そこで私は、次の条件をもち出した。

第一、難かしい病人は私自身処置するが、その時必ず交替して二人又はそれ以上の生徒が私について来ること（即ち、私の傍に立つて見ている事はさしつかえない。）そして、その病人に関することを筆記すること。

第二、軽症の病人は私は単に視るだけにして、生徒に診断をつけさす。その処置に就いては、生徒と一緒に相談しよう。従つてその際、生徒自身が主治医となつて、自分でやつて見る。時々私がのぞいて視るだけにする。

第三、長期に渉る患者や癈疾—それは充分長期に渉つて処置したが—には、私自身ありとあらゆる特殊治療を行う。けれども最後は、その継続治療を他の日本人医師に移す。勿論この際その医師を監督して、私の処方が正しく続行されているかを確かめる。

第四、毎日夥しい人数の外来患者が、朝九時に受付られる。診察室で生徒に教える。事情に依つては処置をして見せる。又、それすらも時間がなくて出来かねるものもある。この処置はすべて生徒の面前で行う。これは謂わば外来処置であるが、その記録はすべて保存する。その中には処置法や病症日誌が含まれている。これを読むと充分教えられる筈である。

かくするうちに日々診療を依頼する者が殖えて来た。ために充分といつてよい程、沢山の病人を診ることが出来た。遠隔の地から長崎さして、絶えず病人がやつてきた。朝の診察時間に受付られる病人は全部で四十—五十人にのぼる。これは誠に手間のかゝる事である。なぜならすぐそこで小手術もしなければならず、中には複雑な且つ陳旧性な疾病があつて、ゆつくりと研究して見なければならぬものも随分多い。これ等の難病に対しては、然し病院の設備が不充分で、どうすることも出来なかつた。講義は外来患者の処置が済んで始める。そのうち長崎居住の欧洲人も、だん〳〵と人数が殖えてきた。夏には隣りの不衛生な上海から、沢山な家族が保養のため来る。かなり賑やかに連絡船が合計十二人、或はそれ以上の客を運んでくる。その時碇泊所に出迎える医師は、私一人である。病人は何人を問わず救護しなければならぬ。然るに言いたくないが私の手は一杯である。殊に一八五九年に薬剤の仕事をしていた調剤助手が爪哇に出発してから、私自身薬剤師の仕事もしなければならなかつた。

授業そのものも、随分時間のかゝるものである。私自身としても生徒達と同じように、大いに勉強しなければならない。そのために唯一人夜まで居残るのである。この学校では勿論一科目又はそれ以上の科目を、深く専門に研究しようとするのではない。唯、内科や外科を初め総べてのことを、順序よく次々と教えてゆくだけのことである。多少ともこの間の事情を知つている人には、これはなる程楽でないと諒解して戴けると思う。一分と雖も仕事場に居なければならぬ。他の所へゆくわけに参らぬ。私の後任ドクトル・ボードウインが専門に取扱つたのは二、三科目であつたが、多年オランダ陸軍軍医学校で教職にあつたので、こんな事にも慣れている筈である。長崎ではその頃、特別気紛れな事がよく起つたが、彼は独りで熱心に処理し監督もした。彼とても私同様である。人間独りではとても出来そ

うでない事を在任中より独りで始末した。充分にそれを経験した。

一八五九年夏の頃、再び余り喜ばしいことでもないが、コレラ病に見舞われた。ためにこの年も亦、多数の犠牲者が出た。ために住民は前年の時よりも、一層怖れおののいた。われ〳〵も欧洲で既に一八三二年に経験したと同じ情況を、親しくまのあたりにした。市民は外人が飲料水に何か故意に毒物を投じたのだと邪推し、医師に対しては病人は癒らぬ方がよいでしよう。その方がよく儲かるでしようと、いやがらせをいつた。市当局は衛生法規が不徹底で、かくも蔓延をきたさせたのだと非難をあびた。私個人には、殊に甚だしい攻撃が向けられた。一体全体私のやつている施術は、あれは何だろうかとか、実際、病人を次から次にと殺しているではないか等々という。いや確かに私の民衆の苦情通りの人間であつた。なぜなら四十年来、誰もこの病気に就いて正確な知識を持つているものもなく、尚又、さる二年間流行した時に於てすらもそうであつた。恰度、都合のよい事に、この年から新しい欧洲人が日本に入国するには、新しい法規に依らねば入国出来なくなつた。この事は今度のわれ〳〵に対する民衆の興奮を多少ともなだめるに役立つた。民衆は行列をなして町内を練り歩いた。そしてこの行列にいろ〳〵雑多な神様がかつがれて、この神様の力によつて瘴気を追払うのである。又これによつてあわよくば、行列と外国人と出会いがしらにぶつかろうとする策を弄した。私は二度もこのような行列に出会つた。一度は私自身、誠に危険なことに曝された。というのは一人ならず二、三人が、その家族の病気を癒したことがあるので行列の中から私を見つけだしたのである。或日は私に対し悪質な反撃の気配がみなぎつた。それはいろ〳〵な理由で学校から追放された、二、三の医学生の陰謀だつたことに後日気がついた。こんな時は人も知る如く群集が平静を失つて、心理的にすぐ興奮するものである。時には騒動は更に倍加し、遂に暴動化するものである。従つてこんな時にこそ、平素より尚一層沈着冷静にしたいものだ。私の忠言と身を粉にしての苦労に酬ゆるに、今述べたような激越な反撃で私を窮地に陥し入れようとする。いかにも情ない事であつた。一体人々は診療の外に私に何をしてくれというのだろうか？　朝は早くから夜はおそくまで、私は

一瞬の休養もとらず働いた。食事の暇すらなかつた。それなのに、診察した病人を皆癒すことが出来ないとかいつて難癖つけるのである。然し私は診療の点では、相当好成績を収めたと思う。即ちコレラ患者の三分の二は治癒せしめ、単に三分の一だけが死の転帰をとつたに過ぎない。

述べたような環境のもとで、外国に来て唯一人孤影悄然、援助を請う役人もなく相談すべき親友もない有様である。そんな時果して人はどんな気がするか。諸君は想像することも出来まい。こんな時は唯与えられた自分の義務を果したという自慰を、心に感ずる以外に何物もない。然しその日頃私に捧げてくれた心ある生徒の、熱心な援助には感謝の意を表する。彼等の行動は全く殊勝であつた。

皆さん、私がこれから話すことに驚かないで下さい。一八三三年欧洲に突発したコレラ病事件は更に〳〵悲惨を極めたものであつた。殊にセントペテルスブルグに起つた事は最も惨めで、民衆は激昂して医師を河に突き落して溺死させるという事態となつた。そこで遂に己むなく、露国皇帝陛下の勅語を奏請することになつた。巴里では実際二、三の医師をセイヌ川に投げ込み、当時仏蘭西全国の大きい市街は殆んど皆といつてよい位、混乱と野蛮の巷と化してしまつた。

実に夥しい人々が思いもかけなくコロリと、次から次へ死んでゆく。然も更にひどい事は、その時は未だ一体全体これは何という病でこんなに大勢人が死んでいくのか、かいもく判らなかつたのだ。全くこの欧洲での惨事と、今度の長崎にてのそれとを比較すれば、文明人と呼ばれるわれ等欧洲人より、日本人の方が遙かに冷静であつたと申して過言ではない。

誠に不思議にもこのコレラ病は、徐々に終息した。民衆の気持も一変した。今度は逆に自分に対し深い友愛の情を示し、恰度かつてのあの激しかつた気勢今いずこの感がした。彼等はかつての興奮を顧みて、実に馬鹿げた事だつたと悟り初めたのだ。時が経つにつれ明かに感謝の意を表し、政庁も開業医諸君も勿論、全民衆までも深い情愛と感恩

の誠を示した。将軍陛下からこの第二の流行病の終末後、直ちに一振の恩賜の長刀を戴いたのである。これはわれ等如き者には、未だかつてない優諚であつた。諸多の大名からは数々の贈物を拝し、尚且つ多くの日本人からはごく美しい絹を貰つた。彼等も私になした不都合を忘れて欲しいらしいが、その心配は無用。何故ならば私は今は思い出せぬ程、当時のことを軽く見送つてしまつたからである。この突発事件のため授業は大変遅れた。私は医学以外の講義をしば〳〵設ける余裕もなくなつた。勿論、疾病に就いてのみ、講義を進めていかねばならなくなつた。そうしている内に遅れた学課は取り戻すことが出来て、総べては又従来通り規則正しく進捗した。

さて私はお話を疾病治療法から初めよう。私には心よい職場が、新たに与えられた。それは新病院の建築がかなりよく捗どつたからである。建物とその装備に就いては日本政庁は、私にすべてを委してくれた。然し日本政庁は病人を看病する法式に就いては、いろ〳〵な行政的注文を出した。けれども前にも話したように、これ等の注文をそのまゝうけ容れると、これから私が始めようとする新しい規格の美点は、殆んど駄目になつてしまうであろう。例えば政庁は、病人はベットに寝ることは喜ばないでしようという。国の風習で、床に直接褥を敷くでしよう等と勝手に独りぎめしている。食事は日本人の習慣のものを食べるであろう。着物とても院内では、殆んどしきたりの今までのものを着るであろうという。これ等の事にも政庁当局は、一生懸命私に協力したが惜しい哉みなわれ〳〵の目的をはずれている。私が気がついた規格は、すべてすぐにわが病院の管理をしている政庁の上役に、意見として具申した。私はなるべく総べてを、明らさまに政庁長官閣下に説明して諒解を求めた。然し常の如く例の返事、『そんな事は日本では無理ですよ。日本には古くからのしきたりと風習がありますからね』のクラシツク一点張りである。

けれども私は曰く、皆はクド〳〵しい古い在来の日本式病院の規格を固執するが、今度私が新しく造ろうとするのは全く新しい様式のもので、実に日本に最初に生れようとする第一級病院である。然し、これに対する役人の返事は困難の一点張りで『それは楽なことではないでしよう』というのである。手取り早くするために私は少し強硬に出

て、若し病院を私の指令通りに設営させるのなら、医師としても監督としても最高の専断的権限を与えられたし。総べてを委せて欲しいと要求した。皆が私に追従すればよろしいと。遂にこのことは許されて、その後は何も私を責めないようになつた。けれども行政官諸君は尚、時々自分等の意地を張りたいためおせつかいをした。それも私には面倒なので、或日彼等を皆私の家へ連れていつて、起案を政庁の遙か下役の病院係に委してみた。それからは万事がすこぶる円滑になつた。そこで思うに今までのことは、総べて政庁の経済的理由から来ているのだと。欧洲ではこんな事は全く逆の考えである。病院建設を委された医師には、総べて全権が委任されるであろう。その医師は病人に必要と思われることは、なんでもすることが出来る。唯、国家はその責任上、監視するだけのことだ。設計に対し指図したり、たてつく事は出来ない。『それはいけない』とか『それは出来ない』等と誰も一言も容喙し得ない。病院管理医師は完全に信頼され、政庁は医師の命に唯従うだけである。然し日本の場合も、これからはこれは適切と思つてすぐそれを要求すれば目的を達するようになつた（思うに今や故海軍長官ハイセン・ファン・カッチンデイケが立案した規構は、新様式のこの病院に実施されるに到つた）。

一八六一年には、病院は完全に竣工した。八の総室。その各総室には十五のベットがある。その外に四の個室があつて、病気によつてはそこに単独に収容される。又、手術を受けたものもそこに収容される。相応な、そして良い薬物学雑誌が備えられ、充分な器械類と図書（この図書は私が帰国の際江戸へ発送された）。立派な料理室—こゝでは病人のため必要な、時には洋食が供せられる——私に属する病院管理者室、設備よい当直医員室、ゆきとゞいた浴室と恢復期患者のための散歩場、病院の隣りに教室が建てられ、そこで生徒に講義が行われ、又、生徒が時々そこに集合して松本君の指示をうけることにも使われた。

かくて愈々素敵な第一歩が踏み出された。九月二十一日に病院は開設され、その時日本政府の取計らいで日蘭両国旗が相ならんで立てられて、仲良く飜つていた。

かくしているうちにも、私の仕事は大変模様が変つてきた。朝八時に病院に出勤して朝の廻診をすますが、その時生徒達は私に従つてきて用事をする。それは全くわがオランダ国でしている事と同じである。生徒等は自分の分担をすます。そして、それは三ヶ月交替になる。かくて各生徒の課業は繃帯術、処方箋の記載、調剤室での薬剤の取扱い、食事と入浴の監督、牛痘種痘に関する特別記載、病歴カルテや日記の保存等である。

薬局では、調剤に関する実地訓練を与えた。廻診がすむと外来患者が来ていて、診察を待つている。それからベットのそばで臨床講義に移る。それがすむと二時間講義をするが、その後は午後三時までは休憩する。その後は五時まで再び授業がある。それから院内の午後の廻診をすませば、私の一日の仕事は全部終りである。従つてこれを合計すると、随分な時間がこれにとられてしまう。勉強は日本人医学徒によつて熱心に且つ立派に行われ、又それを松本君はよく手伝つた。松本君は誠に勤めの良く出来た人であつた。その後生徒達から、今少し課業を楽にして欲しいと申出があつたが、私はこれを許さなかつた。それは後になつてその道理がよく判つて、その時こそなる程と喜ぶ性質のものだからである。全生徒数は五十人であつた。生徒同志には、規律が保たれるべきである否実際そうであつた。病人の処置と看護に就いて無茶になる等は、もつての外のことである。それは私自身のためこれを要求するのでなく、私の部下として無茶な事は納得ゆかぬ事である。よろしく医学生達は一度この職業だと決定した以上、それに全力を尽すべきである。彼には既に病苦の人が寄託されていると知つたら、その病人に尽しもう自分の身体と思つてはならぬ。それが嫌だつたら、寧ろ他の何かの職業に移り変るべきである。

それ以外の事に就いては私は常に生徒のよいようにと、これつとめたのである。服務以外では、生徒等は皆私の友人であつた。

病院が一般に開放されるや、沢山の人が診察を受けに来た。二、三週間後には既に七十人の病人が来た。日本政庁は多少とも裕福な人には診療費を徴収すべきだというので、その人達には並の料金を貰つた。希望があれば、区長が

この人は貧しいとの証明さえあれば、何時でも無料とした。欧洲人には特別室を設け、一日につき二メキシコドルを徴収した。即ち、これはオランダ時価五フランより多少高くつく。一寸考えると、これは高価なようにも見える。然し考えてもご覧、西洋では医師の往診料は大変高く、一回の往診に四—五ドルとつている。この標準から申せば、まる一日間の看護料として一日につき二ドルは恰度よい加減であろう。欧洲人のため病室を作つたのは、永い間の要望に答えたのだ。客を満載した商船が港に着く度に、何時も病人を沢山かゝえている。時には死人すら出て来ている始末である。病人をつきゝりで停船中の甲板で処置する等は、全くやれた話でない。第一、私の時間はそれに全部とられてしまう。その上、船客の中には疱瘡・チフス・コレラ・骨折等を病んだものまで連れて来ることすらある。これ等を商船の甲板で充分手当するなど、先ず不可能な事である。新しく病院が出来たことは、航海業にとつても一大改善である。更にそれは船主にとつても、経済上誠に有利である。軍艦とても時々病人、殊に伝染病患者を運んでくる。病院収入は全部、日本政庁国庫に納入された。そして全く自由な立場にありたいために、病院内の私の労作に対する特別賞与は辞退した。

二、三日すると病院に来る日本人は、大抵男も女も金持階級に属することに気がついた。然も殆んど総べてが政庁の官吏達である。私は既に相当永らく日本に滞在したので、これが土地の特殊事情によることも判つている。事実、私には病院をこれ等階級の病人の占有物と考え、職員や高官のためには一種の避難所とでも考えているように見える。日本の国民性として労働者や日傭人達は、富貴の人達との同列は好まぬようである。ためにこれ等貧しい人は、病院に来たがらぬようである。否、これ等貧しい人が若し病院へお願いしたいというと、その所属の役人からにべなくことわられる。この事が確かになつたので、すぐに私はこの悪習を全力あげて破つてみたが、間もなくこの陋習も変つてきた。病院こそ貧しい人々のため、建てられているのだ。勿論私とても、この病院で金持の人達の看病をすることにもやぶさかではないが、誰より貧しい階級の人を犠牲にしてまでやつてはならぬと思う。職員や役人には余裕

があれば別の病棟にしておいた特別室を、これにあてがつた。若しそれが出来なければ己むを得ず、他の人達と同居させざるを得なかつた。暫くするうちに、総べてがうまくいつた。

何としても誠に珍しいのは、時々高貴の家庭のお嬢さんが、半ダース許りの女中を連れて、あちこちの室を廻つて診療をうける姿である。勿論これ等奉公人すべてを診察室に入れることはもつての外のことで、私としてはせい〳〵格別の取りはからいで、一人だけ入室を許した。けれども一人も許さぬというのは、どうかと思う。余り厳に過ぎると今までの経験によれば役人達の怒りを買う。後日事毎に私にたてつく。そして詮方なく、こちらが尻込みをしなければならぬからだ。

私は何も好んで、そんな喧嘩をする気はない。それは病院のためにも不利だからである。つまらぬ事に損をせぬように、おだやかにした。譲歩したのである。そうすると民衆も絶えず喜んで、病院を訪ねて来る。富めるものも貧しいものも。

食事のことは誠にうまくいつた。唯、日本人にはきまつた時に食事さすことは、なか〳〵むつかしかつた。彼等の習慣として物が食べたい時には、すぐに箸をとる癖がある。ご飯はいつも炊いて、そばにおいてある。それで欲しい時は、すぐに食べることが出来る。これをやめさすのに初めのうちは随分骨が折れたが、二、三週間するうちによく諒解してくれて、こちらのいう事をよく聴いてくれるようになつた。

ベットに寝るのは最初のうち、かなり慣れない事であつたが、だん〳〵とよくなつた。けれども彼等にいわすと、下に寝る方が楽だと。概して日本人はこれはよい事だと判れば、気軽くだん〳〵にわれ〳〵のまねをするようである。この点、彼等は大変実際的である。

平均して一二四ベットのうち、七十から三十ベットを使つていた。合計二七〇一三診療日数。これは各病人に平均すると、約二九診療日数となる。この事は病院としては、平均して確かに長すぎる入院日数となる。けれどもそれ

は、誠に沢山の長期治療を要する悪性疾病を取扱つたことを、考慮に入れねばならぬ。ことに一定の規則正しい時間的治療の必要な患者が入院したために、かくは数字が大きくなつたのだ。九三〇名の患者のうち七四〇名は全快した。ところが九四名は治療が余り長引くので退院した。人々は何か私が魔法でも使つているらしいと思つている。多年悩んでいた病気が四五日で治るからである。こんなにうまくいかぬ場合は退院するが、その人数はまず九四名であつた。死去した人数は十三名で、なかんずく七名はコレラ患者であつた。唯、二屍体だけが引取るべき親族がなくて、解剖実習に用いた。結局三七名が不治の病として諦められ、四六名は一八六二年九月二十一日には尚入院治療中であつた。これ等の比例は次の表をご覧になれば一層明瞭になる。

一八六一年九月二十一日より一八六二年九月二十一日までの間

治療うけし者	合計九三〇
全快	七四〇
治癒せずに退院	九四
死去	一三
不治	三七
治療中	四六

結果はこのように悪くない。けれどもこの際、一言説明したい事がある。このように死亡数が少ない事は、一部は最早死が近ずいたと思われる病人は、一旦自分の家へ連れ帰つて、そこで最後の息を引きとらせるためである。

日本ではその身近い人が、病院で死ぬことを喜ばない。その主な理由は、殊にその葬儀にあたつて、いろいろ数多いややこしい形式を採らねばならぬし、その形式も日本人は省略するを好まぬし、そんな事を病院内で行うことは不可能だからである。

日本では誰か死ぬとすぐさま、その家は閉じられ、門戸にこの家のうちに死人があるという貼紙が貼られる。それ

は誰も中に入らぬように、気をつけて欲しいからである。若し誰か家の中に入り込むと、屍体に触れて不潔となるからである。彼等は屍体のある家は、寧ろ家全体が不浄だとおおげさにいうのである。死亡後、殊に死人に身近い血縁は直ちに特別な室に退いて、屍体が家にある間は着物を反対にして着ている。屍体は綺麗に清拭され、続いて埋葬に必要な事は総べて隣人や友人達に委せきる。隣人がこの悲しい事態にお役に立つというのは、確かに最もふさわしい事だろう。

屍体は死亡後二、三時間して注意深く洗い浄められ、長いそして広く白い屍衣が着せられる。薄暗く朦朧とした部屋には、一、二点の燈明が点ぜられ仏壇は飾られ、扉は左右に開けられ数多の線香が薫ぜられる。ところが僧侶は死人の家の財力の許す範囲を見はからって、坊さんの数を或は多く或は少く葬式に送り込む。坊さんは屍衣の背中に二、三の文字を書くが、第一に死人の姓名と、その場の都合でそれに関した二、三の事を書き添える。これ等の文字は死人があの世に足を踏み入れて、逢う人毎に今後お見知りおきを願うためで、いわば一種の名刺代りの役をする。

屍体はわがオランダ国と異なって、寝棺におさめない。半坐位又は中腰にして、大きい丸い桶に容れられる。この棺桶は更に裕福な階級なら、そのため特に造られた大きい土壺、所謂マルテフアーネンに安置される。

死人の友人や隣人達は墓穴を掘る手伝いをするが、その時それぞれ順位を考えて掘らねば、その家の最後の死人の入る余地が無くなる。墓穴は後に水が貯って屍体を汚さないように、セメントで周囲を固める。普通は家族一人々々が自分の墓をもつことになる。墓地は現今は市外に沢山見られる。昔は寺院の境内にあった。然し現代でも、非常な高官とか有名人或は僧侶の如き特別な人はそうである。日本人は彼等の墓地には最も崇敬の念を持つ。彼の愛する人々の永久の憩いの場所を気持よいものにするためには、彼の全財産を投じても悔いない。毎年これ等の墓場は美しく整えられ、きちんとするように洗い清められる。必要な所は塗り込められ、墓石は綺麗にされ、墓碑銘は時々文字が書き替えられる。そして何時も気をつけて、立木や花が供せられる。日本人がいかにも熱心に、いかにこれ等総べて

の事に気を使つているかをまのあたりにすると、胸を打たれる思いである。

一度墓地が手に入るや、金持はすぐ周囲を壁で囲んで、徐々に小綺麗にする。やや貧しい人々は、かなり辺鄙な場所に墓地を持つことで満足としなければならない。しばしばかなり高い山の頂上のこともあるが、それでも出来る限り飾りつける。家族から最初の死人が出たとせよ。例えば父親とせよ。遺族はなるたけ早く、垂直に起立する墓石を作らねばならぬ。墓石は多少高価なものにつくが、財の許す限りで求めねばならない。富める人は時に随分凝つた記念碑を建てる。

亡くなつた主人の墓石に並んで、いずれ遅れて入るであろうが未だ生きている夫人の墓石も建てることがある。碑面に今は亡き人の名前が彫り刻まれる。その名前のことは私が既に以前お話したが、彼の死後新しい名前がつけられるのだ。時には同時に彼が生存中使つていた名前をも彫る。どの場合も碑銘はより詳しく書かれているようで、時にはしやれた字体すら見受ける。未だ生きている人の墓石の文字もいち早く仕上げられるが、唯異る点は既に亡くなつ人の文字は黒か鍍金であるが、これに反し未だ生きている人のは文字が赤く書かれている。一度そこに入れば、後々幾久しく墓参する人々の思い出に便になる。今まで幾度か死の危険や災難に打ち勝つて生き永らえたことを祝うため、日本人は彼等の誕生日に墓参する。そしてそこで数時間を過す。これは彼等にとつて最上の喜びであり、又慰安なのである。

この世ではこれといつて恵まれない多くの人々にとつては、既に一足先に亡くなつた愛しい子等と相並んで、いつかはそこに葬られねばならぬその場所を眺めることは、一つの幸福なのである。この墓場で日本人をみると、われわれはおのずと尊敬の念が湧いてくる。若しそれ最愛の人が亡くなつて、そのお墓に佇める人の愁嘆を見ると、私は何といつてよいか適切な言葉を知らない。それ程気の毒な思いがする。唯々、心からなる同情の意を表する外はない。

屍体は普通、地上に三、四日停めおかれる。危険な病気で亡くなつた時には、日本ではなるたけ早く埋葬される

が、二十四時間以内というわけにはまいらぬ。埋葬の準備が完了すると、近所、近辺の人、僧侶、近親達や友人が死人の家に集つて来て葬式が始まる。大抵日暮にとり行われるが、時には夜おそく行われる事もある。けれどもこれは高貴の人のすることで、その儀式はたいまつの灯りでとり行われる。

棺桶又はマルテフアーネンは輿に乗せられ、これを担ぐ使丁は白い服に身を装つている。使丁が不足の時は、近所の人達がこの役を買つて出る。屍骸のある棺の上には、一つの丸い形の天蓋が蔽いかぶさつている。この天蓋の骨格は薄板で、それを白紙で貼りめぐらせたものに過ぎない。その上更にこの天蓋は、白い紙製の小旗のようなものや御幣で飾られている。勿論このような葬式に多少とも華麗、荘厳の気風があるかどうかは、わがオランダと同じように屍者の社会的地位に依つてきまることである。葬列の先頭は、たいまつを持つ人である。それに続いて伴僧それを取り捲く寺の合唱隊更に儀礼用の僧衣を装つた僧侶である。この合唱隊は香煙くすぶる線香を捧持している。僧侶に続いてたいまつや提灯捧持者、更に二、三人が白旗又は多くは紙製の長い旗を掲げてついてゆく。

僧列の後に屍を載せている輿が従い、その更に後に引続いて近所隣りの人々や友人達が従う。皆、式服を着ている。かくて死者の血縁達が葬列の最後である。この葬列の最後の人達はつつましく喪服に身を包んでいるが、婦女等はいずれも白装束であり白頭巾である。

屍体が己が家を出て寺に達するや衆僧は直ちに鉦を叩いて、さてこれから葬式が始まることを御本尊の仏様にお知らせする。御輿は仏壇の前に安置され、仏壇の上には一つの小さい位牌がおかれるが、これぞ誠の亡者の標識として祀られる。衆僧はここで、死者の霊よ安らかなれと祈り奉るが、これぞ棺側での最後の訣別に外ならぬ。かくして屍体は鉦の音安らかに寺院を出て、今来た行列と同じ順で墓地へと進む。墓地に辿り着くと僧侶達は今一度祈りを捧げ、続いて埋葬に移る。埋葬がすんでからは唯単に、隣家の人達や遺族である血縁のものが死人の出た家へと急ぐ。

或る宗派では、屍体は火葬に附せられる。私は事実二、三度これを長崎市外の金比羅山で見た。骨灰は石壺によせ

集められ、この壺はその後同じような方法で土中に埋められる。

遺族は八週間の間は、つつましく喪服を身にまとう。男は頭髪も髯も剃らない。婦女は白い衣服を着ている。そしてこの人達は、なるべく用事の外は街に出て行かない。喪が明けると遺族等は、死人の世話になつた人々を総べて残さず御礼に廻る。

このように随分面倒臭い形式があることを、皆さんよくお判りであろう。殊に屍体がまだ家に安置されている間に受ける弔問客の応接、その時は死人の家の門辺で喪服の近隣の人が一人何か小さい紙包みを受け取つている。若し病人が病院で亡くなつたとすると、更に面倒な事が起つてくる。けれども日本人は、このようなあらゆる形式を大切にして、誠に必要欠くべからざるものと考えている。

以前、教室で行つていた外来患者診療は今や新病院で、然もそのため特別設計した室で行うことになつた。そこで私は思いの儘の治療を行うことが出来、規定の如く学術研究までも可能となつた（その性質上、教室では充分に行うことの出来なかつた事を）。

さて次に私は、診療記録をも微細に記入の上保存させたので、診療を今までより充分に監督することが出来た。又、正確に規定通りに処置し看護すべき性質の病人が来た時には、その人から優先的に入院させた。今は外来処置室も以前より患者が殖えて、忙しくなつた。手術もしやすくなつた。以前はこの手術も、教室で己むを得ず行つていたものだつた。従つて手術室は、充分その機能を発揮するようになつた。元来われわれ海軍軍医は、この点は恵まれていないと申してよかろう。殊に輸送船や旧式の三本マストの帆船で航海する時は、尚更そうである。それでもわれわれは同僚軍医官達と出来る範囲で、喜んで船室で手術を行つたものである。

私が日本滞在五年間に取扱つた日本人病人の数は一万三千六百に達する（今度新しく出来た病院の病人数はこれに算入してない）。なかんずく五千六百は男、五千七百は女、二千三百は子供であつた。

勿論、こゝで私は更に医療方面のことを、くど〳〵しく論説しない。無駄な事をして医者でもない読者諸君を、これ以上退屈さすべきでないと思う。けれども本書の如き性質の書籍では、このような実情をなおざりにしておくべきでもなかろう。一面からいつて、二、三の実情をお知らせして、将来極東へ旅行せられる人々のお役に立つようにしたい意図をも、私は持つている。いわんや今も尚、極東の実情はそのまゝ少しも変つていないからである。

日本には胸部疾患が甚だ多い。肺病、気管支疾患、或は又心臓病もさようである。

肺病にもいろ〳〵細かい差異があり、気管支病も同じことである。一日中の著しい気温の変動、頸部や胸部を着物で包まずに露出していることが、かく多数の胸部疾患への誘因を与える。遺伝的基盤も、この際随分大きい役目を果す。日本ではやはり父親側の罪悪が、その子孫に現われると思われることがしば〳〵である。私はそれに関する、大変悲しい記録を持つている。はつきりと胸部疾患を既往症に持つている人達には、日本旅行は断然中止すべきだと思う。殊に一日中でも気温が急変する点からもお奨めしない。心臓病の多い事は何事にも過度、例えばきつい酒類の飲み過ぎ、熱し過ぎた風呂へ入ること、然もそれを度々すること、更にいけない事は度はずれた放蕩こそその主な原因であろう。規則正しく生活しておれば、日本の気候は心臓病には、わがオランダ国より不適当でない。

日本では眼病も大変多い。世界の何処にも日本のように、盲人の多い国はない。その大半の原因は、眼疾治療法の無知に帰すべきであろう。眼疾治療法は、病気の最初に良く処置して直ちに全快さすべき事にそのコツがある。これをしないから遂に多数の病人を視力喪失にまで追い込むのである。網膜疾患は特別に多種多様のようである。白内障も亦そうである。顆粒を私はそこに数度ならず見た。けれどもこれは決して、流行性のものではない。眼病人はいくらでも来るから、眼病に就いては何も症例の不足を思案することはない。何故かくまでも多いか。きつい酒を飲み過ぎること、熱い風呂に入つて頭を少しも濡らさない事が、惹いてはひどい頭部昏迷を来し、そのため眼病が多い。又、運動不足（特別な目的なしに唯、楽しみに散歩するということを、日本人は知らない）の結果、下腹部にのみ充血すること、

性欲の乱発、日本には甚だ多い寄生虫病等もその原因である。かく多くの眼病を誘発するのは気候のためより、寧ろ日本人の生活様式によるのであろう。

胸部疾患と眼病を特に勉強したいと思う人には、私は確信を以て日本へ留学をおすゝめする。数限りないそれ等の症例を見ることが出来る。殊に病院では申し分のない程、眼疾研究の好機に恵まれる。旅行は現代では最早大した問題でない。陸路巴里から日本へ、五十五日で到着出来る。又、この旅行そのものこそ、既に誠に興味深いものである。

腹部疾患には、日本の気候は大変好ましい効果を与える。地方病としての消化器病は、日本には見られない。これに反し、隣りの上海では誠に多く、然も病型が悪性である。上海は周囲が湖沼やじめ〳〵した稲田にとりまかれ、且つ揚子江に臨んでいる。この河は大変大きいもので、間もなく海に注ぐので上海では河水は塩水と淡水とが混つている。こゝは夏は気温が大変高く、大抵華氏九十度に昇る。赤痢や肝臓病が多いのは、そこに原因があるという。これ等の病人も早く日本へ来れば、特別に薬を用いなくても間なしに癒る。日本の気候のよいことこそ、最上の良薬である。今一歩すゝめて、爪哇と日本との汽船連絡を直結させて戴きたい。そうすれば日本は、赤痢病人に対する絶好な保養地であろう。私はこゝに、そのような意見を提出する。

牛痘種痘法、この事に関しても日本人は合理的であるに拘わらず、喜んで範を欧洲に採ろうとしない。日本人は誠に度々、又烈しくこの痘病流行によつて荒らされた。勿論この病気を少しでも駆逐することが出来るならばと、私はあらゆる手段を講じた。何処の国でも日本程、痘痕のある人の多いところを知らない。住民の大凡三分の一はこの病気の特徴である例の痘痕をもつている、と断言してはゞからない。何故にその症状がひとりこの国にのみ烈しいかという理由は、人も知る如く次のように考えてよろしかろう。即ち牛痘種痘法は既に四十年前から実行されているに拘わらず、日本では等閑に附せられていて、今に尚余り用いられていない。そのため前世紀われ〳〵欧洲諸国をおびやかした頃と同様な危険が、今もこの国に迫つている。明かに一八二四年か二五年に、始めて牛痘種痘法を日本に伝

え、早くもこれを実施したドクトル・フオン・シーボルトの功績は認めねばならぬ。この碩学が国事犯に捲き込まれたため、この有益な施術が再び闇に葬られた。氏自身、最早これを管理実行する事が不可能となつたのだ。

一八四九年に軍医ドクトル・オー・モーニツケが再度この種痘法をとりあげ、型の如く長崎種痘所を組織し、そこで彼は厳重な管理をした。彼は常に良い痘苗の絶えないように注意し、またこれを他の地方へ送り届け得るようにした。モーニツケが日本にいる間は勿論のこと、氏が帰国後も尚総べてはうまくいつた。その後任者ドクトル・フアン・デン・ブロックは、これを深く追究する機会もなかつたようで、氏の滞日中は種痘法は再び不振となつた。即ち単に一個人から他の人へと際限なく一本調子に植えつがれるだけであつた。何等の管理もされなかつた。痘苗はために古くなつた。その予防力は喪失してしまい、従つて人々の信用も無くなつた。

痘禍は再び猛烈となり、一八五四年と一八五五年に於ける死者は甚だしいものとなつた。これに加うるに、痘病患者に対する乱暴な看護振りは無軌道であつた。患者を余りに早く床払いさせ病室から出させ、否、それどころか戸外にまで外出させる事すらあつたので、病気は蔓延し遂に手の施しようがなくなつた。

一八五八年一月に流行再燃し、真に怖るべき蔓延をみた。当時長崎には痘苗は全く無かつたが、幸いに私は支那(一人の宣教師から)から僅かばかり入手出来て、それに依つて種痘を始めようとした。先ずこの古い痘苗を再生しようと骨折つてみたが、その際政庁は二、三頭の牛を私に提供した。これによつて幸いに、痘苗の需要に応ずることが出来た。更に私は蘭領東印度にいる医務課長に照会して、なるたけ純良な痘苗を入手した(蘭領印度では牛痘種痘法に極めて熱心で、そのために素晴しい機構が設けられていた)。かく私は強力に続行して、なるたけ多くの痘苗を集め、各地方へそれを送り届けた。かくする事に依つて、今や予防力は再び倍加してきた。一八五八年に私は二一八名の小児に、又一八五九年には約千三百名の種痘を行つたことからしても、信用を取戻した証拠になる。私は各藩で行つた種痘の成績を報告してくれるとの約束のもとに、誰にでも出来るだけ沢山の痘苗を供給した。これによつて地域的統計表を作

り最後に綜合的一覧表を作りたいためであつた。この私の希望が容れられて、日本人医師諸君から精密な報告が寄せられた。彼等のレポートから推して、未だすくなからぬ多数の医師が誤つた種痘法を行つている事が判明した。種痘を受けたものの約三分の一は全然発痘していない。そこで私はこの不徹底な種痘法に就いて、通信教授を試みた。袖を長くすると、植えた所を摩擦するので効がなくなるよ、余り度々入浴するといけないよ、殊に種痘したすぐ後での入浴は禁忌である等と。

新しい病院が開院されてから、一週間に一度日時をきめて種痘を行つたので、沢山の子供がこれを受けに来た。その記録を作ること、且又善感した発痘部から痘苗を採取すること、種痘に関する興味ある症状の記載、又その痘苗を内地の各方面に発送すること等、皆私自身で行つた。そして痘病に関する一切の事が極めて順調に進行し、民衆の信用も倍加してきた。種痘に関する嫌悪の情も迷信も、地を払つて無くなつたと申してよい。この怖るべき病気が流行してもさしたる危険が伴わぬ時はよろしいが、殊更に悪性のものが現われても人々に理解がない時は、誠に寒心に堪えぬのである。二、三の藩では大名が民衆に種痘を義務ずけた。薩摩では二才の幼児はすべて種痘を受けねばならぬことにした。若しこれを拒む時は、強権を発動した。江戸では一つの建物があつて、そこで貧しい家の子供を種痘することが出来た。且、そこに小さな病室のようなものを設けて、子供を施術後十日まで滞在させ監督した。かくすると子供を監視することが出来るし、又確実によい経過をとらすことも出来る。

淫売。さて読者諸君に最も興味深いことを、次にお知らせしよう。そのことに就いては、最近殊に英国、並びに米国の著述によつて、多く語られている。私はここに『日本の売淫』と仮に題してみよう。この問題は甚だ特異なものであり、これは日本の社会状態に深く根をおろしている。且又それは同時に、われわれにとつても大変気の毒に堪えぬ事でもある。ために教養ある士は皆当局に対し、切にこの事に就いて何とか考慮を払つて欲しいと注意を促がしている。若し今までに随分友情を以て、日本を誘掖したとせよ。尚これからも、さようにしようとする欧洲文明国とせ

よ。否、更に実際何か良い仕事を日本へ与えようとする気が欧洲文明国にあるならば、万難を排し日本政庁に勧告して今も尚日本に現存する売淫制度なる悪習を、廃棄させて然るべきである。実際日本人は、かの世間周知の破廉恥なことを、教養ある外人紳士に見られることを望んでいるのだろうか。

日本政庁は例のいつものように、その事に就いては全く知りませんでしたという余り意味の無い弁解をして、逃げかくれしようとしても駄目だ。私自身この事に関し、多年奔走したが残念なる哉、何の効果も見られなかつた。日本にはそれ自体、自らなる文化がある筈である。いろいろな点に見受けられる日本人の繊細な然も情愛切々たる情緒とわれわれが夢にも思わぬようなこの野卑な習俗とが、この国自体に両立するとは。この事は欧洲人は誰も、納得し得ぬものである。日本には憂慮に堪えぬ程沢山な淫売婦がいる。政庁は寧ろ、これを保護している。社会も別にこれを恥と思つていない。且、両親は何の不思議もなく、その娘を娼家に売つている。売られた娘達は、唯怖しい仕事を運命だと簡単に片ずけてしまう。このように罪のないのは売られた娘だけで、他のすべての人々にこそ売買の責任がある。この点正しく日本人達は、われ〳〵の眼から見れば低級である。さて私は、この実情を少しばかり具体的に次にお話しよう。

女郎屋は日本には大変沢山ある。殊に政庁のある町にすら、困つたものだがやはり沢山見受けられる（日本人はそれを町の名所にしている。）一種異様な通りがそこにあつて、その通りに面して女郎屋がすべて並んでいる。然るに欧洲に見られるような厳重な監督があつて、地方庁の命令がそこに徹底するというような事もない。ためにしば〳〵不愉快な事が、娼婦その人達にも起る。否、それどころか日本という国では、警察はその場合、楼主の方を保護し弁護する。地方警察はそれ自身特別な権限を貰つている。否、それどころか時には帝王のような特権すら握つている。政庁の役人達は毎年この地方警察を巡視して、楼主の権益が果してうまく保持されているか否かを、後見しなければならぬという。

既に二、三の大名は、女郎屋を藩内から厳に駆逐している。例えば真先に薩摩藩侯はさようにした。けれども薩摩では極めて内密に売春が行われていて、それには別に何の監督もしていない。私は親しくそれを見て、尚一層きつく非難したくなつた。

日本人はこの放埒な性行を、別に悪いこととも罪なこととも思つていない。売淫という言葉は、この国では決して正しい意味にとられていない。日本では欧洲と全然別な意味である。宗教も一般社会通念も、結婚以外の婦女子との性交を禁じていない。従つて正にこの国では、唯々驚くばかりの奇妙なことを見聞する。貧しい両親は、自分の可愛い小娘を売る。然も多くはホンに年端もいかないのに、歴とした女郎屋に、早くも十五才から十六才で、しばしば売つてしまう。この売却は全く貧困から来ることである。両親は自分の子を充分に養うことが出来ないので愛しい子に『こうすればお前のこれからの運勢は、ずつと良い方に開けて来るよ』と、しつかりと得心させて女郎屋へ連れて行く。概して社会の人達はこの売られていく小娘よりも、両親の貧乏に同情の涙を流すのである。この処に既に、欧洲とは根本的な差異がある。欧洲では己れ等が勝手に身を売るのだから、淫売婦自身が社会から白眼視されるのは当然だ。日本では小娘等は、全然罪のない事だ。そしてこれから、どんな怖しい事が起るかを露知らない程の、年端もいかない、いたいけの身で売られるのだ。この子供は喜び勇んで且安心して、両親のいる家を後に出て行くのである。おいしい物が食べられ美しい着物が着せられ、到れり尽せりの生活が出来るに違いないと思いつつ、新しい宿さして出て行く。即ち日本では、よくものの判つた人から卑下を受けるのはこの両親である。否、寧ろ人身売買を許している政庁と、更にこんな子供を買つている家を保護したり保証する法令そのものである。その点教養ある世間一般の人が、こぞつて非難している奴隷制度より、ずつと罪深いものといえよう。その奴隷制度というものは唯単に労働のためにのみ人身を売買するだけのことで、日本のように子供をかりたてて、徐々に然し遂には身心とも駄目になつてしまうような生活に追い込む事はしていない。然して私の知つている限りは、この日本と条約を結んでいる各国から

は、誰ひとりこの悲むべき人身売買を中止させようという論議を出したものはない。この売買暫らく待つた、と抗議を申し込むことは少しもしていない！

この事に関し、この日本で唯独り私だけ反対している。それは事実である。それはこの帝国をより良く、且つより快適に開発し、然も徐々ながら文化国家に誘導したい私の切なる一念からである。

然し何しろ、西欧諸国には一国として〝法制的見地〟からこの問題を解決しようとする熱意のあるものはなく、唯犠牲者が〝気の毒〟だからやつてみようとするだけである。今こそ好機だ。いつも英国人や米国人が口癖のように称えているように、真にキリスト教国は伊達に騒いでいないのなら今こそやるべきだ。又、所謂『キリスト教的文化』とは、あの自己の利益にのみ狂奔する商業開発とは全然似ても似つかぬものなら、今こそそれを示すべきだ。その商業開発だつて、やつと今日僅かに日本に成功したばかりでないか。何故この日本国民のためにこの際、何か良い役に立つ事をしようとしないのか。教化誘導しようとしないのか。唯単に日本に来て財宝を絞りとつて、それを自国に持ち帰るだけのことか。耳触りのよいおべんちやらでは、最早日本民衆の歓心は買えぬ時機となつている。日本国民は実際そんなが言い草唯単に、一時的のごまかし位の事は充分知つていよう。

さて、小娘は売られたとする。その生家はやつと立ち直り、幾許かの金が入るのが普通である。娘はおいしい物が食べられ美しい衣服が着せられ、読み書きと歌舞が教えられ、更に三味線も教わる。家計のことも教わり、それどころか裁縫までも習う。更に嘘つきと詐偽と窃盗は、酷しくたしなめられる。出来るだけ家事を手伝うようにしむけられる。かくの如く小娘達は何の疑いもなく、十五才になるまでは娼家で教育が授けられる。そして娘等は自分の生家に居るよりもずつと多く、又、より充分に教育が仕込まれる。一方にはそれ程の親切があるかと思えば、他方には不可解な悪弊がある。この両方が混然としている状態を、自分の眼で見ると全く説明がつかない。こんな事は日本だけにあることで、その実体を出来るだけ次に書いてみよう。僧侶が度々、女郎屋におつとめに参つて説教をする等とい

うことを、誰もが本当にしないだろう。然もその僧は自分が不合理なことをしているという些かの懸念もなく、場所柄といゝ、その家の中には授戒すべき娘達がいるという環境といゝ、これに微塵の諷諫もないのである。女郎衆も他の一般の人々と同様、当然お寺にお詣りする。法律もそれを一定の権利として認めている。日本の社会もこの公開的の女郎屋を、決して卑しいものと見さげることもない。その点まさに大つぴらである。暗い影など微塵もない。小娘が十五才になると、彼女には怖しい時が来る。それは彼女の住んでいる楼主が、彼女を売淫に追い込むことが出来るからである。かくて娘が滞留して二十五才になるまでは、身柄の所有権はその楼主にある。女郎さんになってからは、人が勝手にこうせよと命じたことは、何事でも堪え忍んでそれをきかねばならぬ。この憫むべき小娘の多くのものは、かくして死んでいく。受けねばならぬ恥かしめは、この娘達には深く骨身に泌みるであろう。私のクリニックにこんな娘達が、度々診療を受けに来たことを白状する。わが身の勤めとしてせい一杯働いた、ために遂に心臓病になつたり肺病になつたり死んでいく。且又、彼女達は一言の不平もいわない。何の嫌味もいわない。総べての彼女達の生活振りが病気の原因であることを、読者諸君にお伝えする。にも拘わらず彼女等は満足していて、彼女等の両親の貧乏こそ不可抗力（Force majeure）であつたという。自分等は決して両親に何の恨みを持つていないという。日本では親と子を結ぶ絆が、このようにしつかりと握り合つている。この互いの絆こそ枷そ、いわば互いの宿命であろう。両親は自分の娘を女郎屋に訪ねる。又逆に娘の方から外出日に両親をその家に見舞うのが、互いのこの上ない慰安となつている。娘が病気にでも罹つたとせよ。母親の心配は一方でない。早速看病に行つて娘に後に年期奉公がすんだその時は又、親の処に帰つて来るのよと、いろ〳〵慰めの言葉を与えてやる。この場の情景を思いめぐらせば、私は不憫で堪らぬのである。売られた小娘は倹約と簡素によつて、少しでも多く両親に仕送りをしようと骨折つてみる。そうする事によつて年期があいたその時は、いくらか役にも立つのであろう。又それで後に彼女自身の生活も楽になる。これ等の女郎屋を監督する立場にある尊敬する某高官が、このわが身を捨てゝ親を助ける娘達のうちでも殊

に範とすべきものを、いくらも私に話してくれたことがあつた。そんな佳話は、わがオランダの社会には全然見られないことだ。こういう感心な話のうちで、いささか私に係り合いのある例をこゝに引用しよう。十七才の姿美しい小娘があつた。不幸にもその母親を亡くし、これに加えて父親は眼を病んで臥せていた。その視力は既に完全に喪つてしまうという有様で、ために一家は赤貧洗うが如き窮地に陥つた（その外に家族には三人のいたいけな子供もいた）。

幾月かの長い間、日本のお医者さんに診て貰つたが、効果はなかつた。今しがた母親も死んだばかりであつた。その医師は遂に私に往診を申し込んできた。診察してみると視力は最早回復せず、早、両眼とも完全に盲目になつてしまつていた。早くも齢は老いてしまい、気心のよく知れ合つていた愛しい女房まで失つて、すつかりやつれ切つた夫であつた。その夫は落着き払つて私の宣告を聴いていたが、はや諦めてしまつて、我と我が身の不運に従うより外はないといつていた。けれども娘にとつてはそうでない。それでも、何とかしようとて私にいうには、家にはこれといつて急場を助ける何物もない。今となつては、私一人が何とかして働く外に方法がないと。私は往診の都度、この小娘が父親に慈愛深い看病をしているのをまのあたりに見た。その都度たびたび眼に涙をためて、何とか未だよい手当はないかというのである。嗚呼万事休す。私はこの際、治癒の望みなしとこの病気の将来を言い続けるより外に手段がなかつた。然しこの娘は夜となく昼となく何とか役に立とうと働きつづけ、私とても勿論その有様を見ては一、二の処置をしなければならなかつた。だんだんと家の中の価値あるものは無くなつてゆき、更に母親の葬式の費用も喰い込んだ。然し未だ墓地に母親の墓石を据えることは出来なかつた。この墓石こそは、後々に子供達が両親の埋めてある位置を知る大切な目標なのである。日本人にとつては誰でも、子孫として財産に余裕が出来て墓石一つ立てるだけの用意が出来るまでは、最大の心配である。又、それまでは安心の出来ぬことなのである。日本人はこの墓石を建てるためには、あらゆるものを犠牲にする。この辛い日々に、医者は盲目の父親に今までの診療費を請求した。万策尽きた娘は立ちどころに父の承諾もなく、一軒の女郎屋に我と我が身を売つてしまつた。そして得た金で彼女は医者

に支払いをすませ、又彼女の母の墓石を買つた！

その頃私が往診して見ると、父親は沈痛な絶望にうち沈んでいるのが判つた。彼にとつては総べてが諦めとなつた。然し彼の娘だけはそんなことで父を歎かすことはいかにも辛抱出来ぬことで、一層のことひと思いに死んでしまいたい、というのである。私はこの事を一人の役人を訪ね、これ〳〵しか〴〵して起つた事だと報告した。その後費用が弁償されて、娘はもと通りに父親の許に戻されたのは、聞いても気持のよい事であつた。父と娘はその後も私に感謝の念を幾久しく抱いていて、私がオランダへ帰る時に、この盲目の老人は、よろめきながらも私の住居にやつて来て、私に永久の別れを述べたのである。彼等の将来の生計費は、私達によつてまかなわれた。

このような記述をご覧になつても、尚どなたか日本の女郎を一概に軽蔑される人がおありでしようか。彼女達を社会の最下級民や非人と見做されますか。女郎達は教養ある人々の厚き慈悲におすがりしないでよいものだろうか？

欧洲人はこの事を承知していて、又これを日本で実地に見ている。否それどころか、外人達は各自の金で遊興している。何等干渉もせずに、この奴隷売買を続行させている。私をしていわしめれば、これでは西洋諸国が東洋諸国を開発する、即ち教化誘導するという聖なる業務を放棄していることになる。一人又二、三人の宣教師が虐待されたといつて、直ちに宣戦を布告するのに、欧洲諸国人には見慣れているからとて、この日本の奴隷売買には何等手をうたない。キリスト教信者への圧迫を解除すべくトルコ政庁に干渉するくせに、日本での年端もいかない子供に関する非人道極まる虐待を、何時までもそのまゝに放置している。それで果して、キリスト教国を一枚看板としているものゝ責務といえようか？　それで果して行儀よい教養ある国民の価値があろうか？　誰も一人として、これを大胆に主張しないのか。否、それではすまされぬ。対策が講ぜられぬ限りは欧洲人は、貴重なる責務を放棄していることになる。奴隷行為を続行させ、遂には世界人類を汚していると正に弾疏されるべきだ。何故ならばこれ等娼妓の全人数は、決して僅かなものでない。江戸だけでも、その数六万と見積る。

役人は役目として、しば〳〵娼家を訪ねる。そこに不法な事がないかどうかを調べるためだ。娼妓はその時、本当に知つて貰いたい事を役人に告げる事が出来よう。然し皆さん！この好機が余り利用されぬものだと、御承知おき下さい。そのようにして楼主をいためると、必ず後に仇を討たれるからである。こういうわけで折角期待された保護も何の得るところなく素通りしてしまうことを、われ〳〵は当然のことだと思わざるを得ない。娼家には交替はあるが二十—四十人の娘達が住んでいる。時々喧嘩が始まつたり意見の相違が起ると、秩序と平和を保つためには何か特別な方法が講ぜられねばならぬと気がつく。

娘達が二十五才になると、再び自由の身になれる。雇主は抵当権を放棄する。私がかくいえば皆様はびつくりするでしようが、その後、娘は名誉ある婦人として実社会に復帰するのである。けれどもこの事は、全く本当のことである。かく年期奉公が済んで娘が生家に帰ると、放逸に流れることもなく、相当な生活を営む。又誰も以前の生活に汚名をかけるものもない。それは人々が小娘の時に何故に売られたかの事情を無理ない事として、よく諒解しているからだ。それどころか、良いお嫁さんになる事すらしば〳〵ある。日本人の説くところによれば、大部分のこれ等娘達は恋愛結婚して家庭に納まるということである。このようにして、かつて〝太夫さん〟（これ等の娘さんをこのように呼んでいる）と呼ばれていた人達がお嫁にゆき、然も良いお母さん振りを発揮している沢山の例を私は見ている。

密淫売はこれに反し、日本では大変に軽蔑される。はつきりと獣のように見做されている。然も密淫の例は余り珍しくない。日本の道徳家連の申すには、わが国には今、組織的な公開的な女郎屋がある。これはとりもなおさず内密でなく、良識と社会通念から許されていることで、いわば最大限の正義の譲歩といえようと。密淫売の方は獣の皮剝ぎ屋、又は穢多より更に身分が下にある。彼等は普通の町並に住まずに、殊更に市外に居を定めねばならぬ。そこで非人の取扱いを受けているという。

娼家に対しては、厳格な医学的監督が極めて必要である。然しそうしたものは、日本には全く見られない。私は政

庁に対し、君達の義務として監視の眼をやすめてはならぬことを納得さすべく、いろ〳〵努力を払つた。けれども常にその返事は否であつた。『日本では大変むつかしい事だ。娘に衛生に注意して日々を暮せと強要することは出来ない。身体はその人のものだ。それに対して誰も、とやかくいう術を知らぬ。政庁当局だつて同じことだ』まずそんな詭弁をその節戴くのである。然しながら日本政庁は、その最も大切な義務を怠つている。否、われ〳〵の関係事項を熱心に申し入れる要望を邪魔している。年々千人を算える婦女が、不幸な病気に身を亡ぼしている。この人間犠牲をよく〳〵観察すれば、この事はひいては国の頽廃を招くことになろう。外の点では、あんなにまで麗わしい島国であるのに。政庁のこのてぬるさのために、最も怖るべき疲労困部が徐々ながら愈々深刻に拡大しつゝある。けれども日本民族の身体と精神に既に一部侵蝕が見られ、これはひいては民族の滅亡を来す惧れがあるので、日本政庁はこれに支柱と限界を与えるべく、強力にこの救済に手をさし伸べたい気はある。何故というに誰しも唯〃健康なる身体にのみ健康なる精神が宿る〃という事位は知つているからだ。こんなわけで早く諸外国がその勢力を利用して、日本の現下のこの悪弊に潔ぎよく結末をつけさすべきを私は提案する。唯、掛合だけでこの悪弊を何時までも継続するに於ては、懲罰に価する事態が来るかも知れぬことを日本政庁に覚悟さすべきである。

さて、私は再び病院と教室の事にお話を戻さねばならない。教室では引きつゞいて教育がとり行われた。特殊な疾病やその治療に関する講義、更に進んでは治療学各論の講義も終つた。かくして私の仕事も終りに近ずいた。手術学と眼科学は初め私が立てた教程のうちで、最後に廻しておいたものであつた。外科手術としては日本人に委せきつていたが、それでも尚、いくらか総べての人が進歩した。二、三の人はかなり上手に手術していた。それは動物を実験台としての練習、殊にその血管の結紮等の練習によつて、かくは良い腕前を得たのであつた。佐藤君という藩侯侍医は、実に見上げた外科医であつた。彼は幾度か人知れず屍体を使つて手術をした。私が彼に命じて生きた人間に就いて行わせた手技から推すに、彼こそ破格の手術堪能者であることが判つた。彼の技は正確で迅速で、且又、すこぶる

冷静である。けれども皆さんに知つておいて欲しい事は、佐藤君の如きは一つの例外であつて。私は多くの日本人外科医も同様に確かに優れているとは決して申さない。否、逆に日本人は解剖学の知識が不足なために、無理からぬ事でメスを何処にあてゝよいか慌てゝいる有様である。唯、確実な知識のみが人に自信を与える。逆にいえば、正確な知識の不足は常に不確実、焦躁と慢心を人に与えるのは当然である。この三つの欠点と、すぐれた外科医の特徴とは明かに両立しないものであろう。この外科手術に関し、私は簡単な要点のみに触れた「虎の巻」を作つた。これによつて皆は手術毎に大いに役立つた。更になるたけ屍体に就いて練習させ、生徒をして生体の手術に役立つようにしむけた唯多くの練習のみが、人をして一人前の手術家たらしめるのである。決して書籍や理論的教育からではない。最初は私自身勿論手術をしたが、その際生徒はたゞ介補させただけである。そうすることにより、生徒はだん〳〵と血に慣れ、更にメスの使い方を見おぼえるのである。この二つの事は大切なモーメントであろう。概して日本人の場合、手術の時は余り嫌気がさゝなかつた。少くとも爪哇人やマズラ人のような事はなかつた。

それから一度は、こんな事もあつた。一婦人の股から下を切断しなければならなかつた。その人が私に『取り去られた足は大事に保存されるであろうか』と質問した。そのわけは、自分はこれから後々一本足ではとても楽しくはやつてゆけない。そこで、せめて取り去られた足を私が死んだ時に一緒に埋めて欲しい。そうすればあの世で、再び必要となつた時にすべてが整うからだと。この事に就いての要求は大体きゝとどけ、又私としても手術がすべて済んだ後に希望の如く最善を尽した。

眼科治療術は理論的にも実際的にも、充分教えた。手術を要する病人は溢れる程あつた。世界の何処にも日本程、眼病人の多いところはあるまい。長崎にての私の経験を土台にして一つの統計を作つた。それによれば市民の大凡八パーセントは眼球疾患に罹つているといつて過言でない。勿論他の都会では、この数字は大いに趣を異にしていよう。寧ろ、日本国全体を通じると眼病は尚遙かに多いものだ。従来の眼科治療術は、何の益するところは無い。日本

の医師は如何にして眼科器械を用いてよいかも知らない。そして日本では到る所で見受けられるように、盲人の数は大変なものである。その大半の原因は、全く逆の治療法をしていた事にある。眼科治療術を特別研究したい人には、日本こそ最もよい機会を与える。日本住民はだん〳〵と、欧洲人の専門家に治療をうけに来る。私は母国では、極めて稀にしか無い病気で、この年になるまで唯書物の上でしか知らなかつたものを日本では度々お目にかゝつた。殊に一、二の極めて明瞭な眼球癌を診た（概して癌患者が多い。）日本人は少しでもそれで良くなると判れば、喜んで手術を受ける。

眼の手術をした病人は皆これでよいと思う日まで、病院に入院させた。それは手術後の成績が、合理的な後処置に全くかゝつているからだ。さもないと眼手術は大抵失敗に終る。

特に眼病人の為に設計する特別室は大いに必要である。然し、これは私が帰国する時には未だ出来ていなかつた。ドクトル・ボードウインにこの希望が引き継がれた。又、ボードウイン君は随分沢山な優秀な手術を行つた。その故に長崎医学校は大変な評判で、今も尚、近所近辺から盲人が殆んど皆と申してよい程、学校を訪ねて診療を請うのである。

私自身初めて医学教育課程を立てゝから五年後の一八六二年八月に、この医学課程は全く終了を告げた。やつとの事でこの年の十一月一日に故国オランダに帰ることになつた。これまでの閑を利用して法医学と医事法制に就いて、少しばかり大切な事を教授した。その間に尚、産科に関する緊要な事項も話しておいた。勿論これ等は総べて、ごくうわすべりの事のみであつた。私自身産科医師ではないので、この学問に就いて充分な教師とはいえなかつた。然しながら今日尚、日本に見られるようにこの学問に全然無知であつたり、馬鹿げた概念が持たれるのもいかゞと思つて、教えたのである。これはホンに、いわば添えものであつた。この学課を簡単にしたのも、決して医学としてこの学問がさ程大切でないというのでなく、最早私にはその時間がなかつたからである。急ぎには仕方ない事だつた。

この著述を終るにあたり、一言述べておきたい。私は既往を回顧して、唯々喜びに堪えない事を。私が日本滞在中、幸にも私の仕事を手伝つていたゞいた人々にこの機会に心から御礼を申し上げる。私のした万事が充分に手順よく進んだとは思わない。又、私自身随分手ぬかりもあつた。けれども人もいう如く、事柄は随分進歩した。授業には規則正しく皆が出席してくれ、概してよい効果を挙げた。総べてはわがオランダ国に於けるように、或生徒は充分に他の生徒は比較的少く利得した。将来に備えての適正な教育方針は、先ず〳〵完遂した。病人に対する処置と看護は、今や院内に於て誠に好ましいものとなつた。

長崎医学校でこれから将来改良が行われるに於ては、わが母国オランダにある小さな且つ沢山な附属病院や病舎等より、明らかに限りない将来性がある。実際オランダでは、何のために少くとも或る種の病院のように、好んであんな最も不適当な貧民街に病院を建てたのだろうか。日本の薬店は上手に欧洲製薬品を供給し、値段も安かつた。日本政庁はコレラ流行後、公衆衛生の緊要な事に気が付いたが、末だ〳〵初歩時代であることはいなめない。然しそれはそれなりに、かなりその為に忙しく皆が立働いた事も事実だ。日本の医師諸君も自覚めて、一層明確な医学を勉強したい欲が出て来た。日本政庁も亦、その必要に迫られ私が帰国する頃には、既に長崎へ新しい医学生諸君が次々に来た。それは中央政庁から或は沢山の藩主から派遣されたもので、いずれも私の後任者から講義を受けたい為であつた。ヨーロッパ式内科及び外科学は、今や普遍化された。これは誠に貴いことである。従つて他の東洋諸国の人達は、日本よりざつと半世紀おくれている事になる。わがオランダ政府が、いつも変らずに貢いでくれた救援や扶助によつて、日本政庁は大変な恩恵を受けた。日本もその有難味を充分知つていた。オランダを確かに利用するだけ利用した筈である。然るにドンケル・クリチウスの帰国後、その後任者を求めるに際し、日本としての要請形式は発せられなかつた。この事はわがオランダ国にとつても、国際的に確かに不利を招いた。

私の講義終了後、生徒の希望があつたので、授業を受けた総べての人に卒業証書を渡した。これは私としても、こ

の機会を利用して学問の進歩の著しかつたことを確認出来て好都合であつた。卒業証書の形式を次のようにした。

第一級・皆の褒めものであつた程、誠によく勉強した。そして実地にやつても充分といえる程上手になつた。

第二級・よく立働いた。又、よく手伝つてくれた。

第三級・授業は確かに受けた。然し、その成績は芳くなかつた。従つて自分の力だけで病人を取扱うには、まだ不充分であろう。

一八六二年十月十五日に、六十一名の医学生が学校を後に巣立つた。なかんずく二十二名は第一級卒業証書、十六名は第二級卒業証書、そして二十三名に第三級が手渡された。これ等の諸君は己が家のある町へ帰つて行つた。そこである者は講師になり、ある者は開業医として腕を揮うであろう。第三級に属した連中は、貰つた卒業証書の内容は誰にも話さないであろう。

第一級の連中は江戸にある医学専門学校の教授として、いろ〳〵の地位についたであろう（そこへ長崎医学校の器械類・図書類が持ち運ばれ、私の後任者の大変な怒を買つた）。松本良順君は江戸に帰つてから、将軍の第一級侍医に就任した。又、陸軍々医総監にもなつた。君の待医任官後間もなく（一八六六年）、将軍は薨去された。彼はこの栄職に大いに働いた。彼はその階級といゝ家柄といゝ、私の門弟中筆頭の人物であつた。その上、彼は長崎医学校退任の時には、最も技術堪能の人となつていた。数々の才能を持つている人でもあつた。この才能をたゆまない熱意を以て極度に発揚したので、事実、同職中の第一位となつた。

他の諸多生徒達は業を卒えて帰郷にあたり、藩主から優遇され、尚、城主から栄職に就かされたものもある。又、他の多くのものも大いにその地位に働いた。私が既に今までにも一度説いたように、日本の上流社会の人達は自身を錬磨することに行きつまつている。然し彼等は生れると同時に、身につけている特権を保持して国の為にお役に立つよう努力さえすれば、まだその地位を持ちこたえるであろう。今の時世こそ、益々有能の士を要求しているからである。皆が辛抱すれば、その地位はまだ〳〵保有されるであろう。さもなければ日本国内だつて他の多くの国々と同様

に、今はまだ貧しい中流階級が徐々ながらも然し確実に、その地位を奪い取つてしまうであろう。近代の日本はこの点、英国によく似ている。英国でも貴族政体（Aristokratie）が敷かれている。そしてこの政体は少しでも多く、国民の進歩発展を来さうと懸命である。そしてこの政体は権勢を振つて、国民に物質上の迷惑をかけても何とも思つていない。自由英国と申しているが、十九世紀の今日でも尚、本質的な専制主義が大きい力をこの国に持つているのを、われ〳〵はよく知つている。それは話に聞く以上のものだとの印象を、われ〳〵に与えている。日本でも同じく今も尚、疑いもなく旗本連中が誠に気概に満ち〳〵ていて、母国日本と政庁を新天地に誘導しようとしている。ためにはどんな困難でも打破しようと努力している。ためには如何なる犠牲をもいとわないというのである。

欧洲への私の帰国

一八六二年の初頭にあたり、私はその年末には必ずオランダへ帰る決心をした事を、日本政庁に通報した。それと同時に、その頃には他の医官が交替を勤めるよう必要な手続をとられるよう意見を附しておいた。政庁は私に、尚一二年踏み留まつて新学期を再び始めて貰いたいとの懇請であつた。然し私はこの懇請を断つた。ぐず〳〵して十月頃には未だ私の後任者が来ないというような事の無いように、注意を促しておいた。私はいろ〳〵の理由で、故国へ帰りたかつた。又、暫時休養をとりたかつた事も事実であつた。一方、私の帰国後、新らしい医官が後任に登場して、偏頗な方向に教育が向けられて片手落になるといる事も、大変心配であつた。いろ〳〵様々な授業はしても、唯単に一人の人が教える限りは、常に一方に偏しがちに進むことは判り切つたことだ。又その上に私が日本滞在中、私自身にとつては何年か私自身の学問が、停頓していたようなものである。この際新進な気風と斬新な学風とをとり入れて貰うがよいと悟つた。

この外になぜ私が、日本に左様ならをしたかつたかの理由が一つある。私はオランダの勢力が日本で、日々衰えて

ゆくのを見るに堪えなかつたからだ。かつてのあれ程までの日本への献策と熱意は、今何処に去つたのだろうか。ドンケル・クルチウス君が日本にいた頃の、オランダの日本においての地位は、欧洲諸国中首位にあつたのを、私はこの眼で見ていた。然るに今や国策の変遷によるとはいえ、かくも多幸なりし地位を失つてしまい果てた。それが私は誠に悲しかつたのだ。私は破壊なるものに断然賛成しない。殊に良いものが壊され、それに替るものが皆無である時には、尚更のことである。

日本に於けるオランダの行政に新しい方策が採られるようになつたのは、本国政府からか、或はオランダ印度支那政府からか、はた又、新任の総領事イエー・カー・ド・ウイツトの個人の考えなのか、私はよく知らない。私は又、誰をも非難したくないが、唯この二年間にオランダの勢力は殆んど失墜して、地を払つたようになつた事を認めている。ド・ウイツト君は確かな方針を立てゝ、オランダだけ特別な状態におくのを好まなかつた。彼は江戸に駐在することを止めて出島に本拠を置くことを承知なら、他の事は総べて他の諸国と協調することにした。けれども私思うに事実が示すように、特別な因縁でオランダが従前通りに日本に勢力を保持してよろしかろう。何もわれ〳〵は互いに勢力を張つて、欧洲諸国と覇を争う必要もないが、欧洲諸国は時々強力な艦隊を日本近海に游曳させている。然るをオランダは時々小さな二本柱の帆船か、或は一隻の汽船を見せる位だ。われ〳〵の勢力は今も尚、昔通り健在でありたい。それにはわれ〳〵が科学の線に沿うて、この日本の発展に寄与しようとする従来の方針を続行すべきである。オランダ海軍派遣団、機関士ハルデス、並びに医学教育、これ等は総べてオランダ政府で決定された方針である。これ等は諸外国の如何なる外交上の手腕よりも、遙かに大きい影響を日本に寄与し続けたのだつた。

然しながら、これ等はだん〳〵と消えて無くなつた。日本人の不手際から、海軍派遣団は遂に沙汰止みとなつた。尚、蒸汽工場の方は新任の某海軍技師の手に、簡単に委ねられた。この人がこの工場の経理を、一手に引き受けていた。それで従前の如きオランダ代表者の仕事が、続けられると思つたのであろうか。

非公式に某土木技師が、長官となつて来た。われ〳〵はこの人に事業と有能を夢にも小さかれと思つたこともない。然るに事実、日本政庁に対する彼の勢力は到底ハルデスの足許にも及ばなかつた。ハルデスはオランダ将校であつた。又、それで終つたが一時的に日本に手を貸したに過ぎなかつた。それでも独りで思うように仕事をした。否殆んど命令権を振つて立働いた。非公式の技師レーミイ君はそれに反し、日本の使用人に過ぎなかつた。日本に従属した人で、その上将校としての地位はなかつた。これ等の関係からして、取扱うことがすべて不利を来さざるを得なかつた。彼は唯、一副技師の資格に過ぎなかつた。この有様では勢のおもむくところ、次の主任は鍛冶屋でよい事になろう。それから——英国又は仏国の機関士がこれにとつて替つて、この衰微をねらうかも知れない。かくて遂にわれ〳〵のオランダ工場、蒸汽工場、否それどころか造船所までも、その利得は喪失に帰するであろう。これ等のことはハルデス君の退任の時に、後任に彼の腹心を当てるよう気をつけてくれたら、このような心配は少しも無かつたであろう。

長崎医学校すらも、早くもこの新情勢の犠牲となつた。日本政府は私に、公式に後任者を推すようにとの事であつた。軍医将校フアン・マンスフエルドを適任として推薦したが、バタビヤ政府主脳はこれを拒絶した。その理由は、総領事からの忠告によるものであつた。この件には私は幸いにも、尚気を配ることが出来た。日本政庁に対する私の力はまだ大きかつたので、オランダ商館の仲介でドクトル・アー・エフ・ボードウインという一等軍医将校で国立陸軍医学校教官を勤めている人を、今すぐにも招聘するよう提案した。この提案を総領事閣下は賛成した。かくて私の帰国前に後任として医学校に新しい力を加え、新生命を吹き込み、更に華々しさを与え得る新人が来朝することゝなつた。その頃英国人は早くも病院を手に入れようとする矢さきであつて、もう病院はわれ〳〵の手から離れてしまつたといつてもよい有様となつた。

今までに述べた事情から、人は一途にこの変遷はド・ウイット君の不手際、無頓着からであると邪推している。然

し事実はこれに反し、ド・ウイツト君は誠に終始一貫、事に当つていたのである。その熱意には頭がさがる思いであつた。君も亦、私同様一本気に奪闘した。日本という国は私達の仕事に就いては好都合で、保守的に生活している国民であつた。何故ならば一度ものを失うと、なか〳〵もとの手に再び帰らぬものである事をよく知つている国である。

一八六三年に日本の事情により、もと〳〵一八五五年の八年間従属していたオランダ殖民省から、関係事項がオランダ外務省に移つてしまつた。ために殖民省所属のド・ウイツト君は東印度政庁の高官として転任し、爪哇に向つた。そして皇帝陛下はフアン・ポルスブロック君を、後任総領事兼江戸政庁への行政代表官に任命し給うた。総領事閣下は極めて日本通である。閣下が今執務しておられる諸多業務は誰に相談することなく、ご自身の広い経験だけで充分であろう。閣下は日本でも尊敬されている。政庁も亦絶大なる信用を閣下に寄せている。信用は尽きるところない程である。何故と申せば、ポルスブロック閣下は既に多事に渉つて全力を以て、日本帝国の福祉に寄与されていた。又、オランダの利益ということにも努力をつゞけていたのである。閣下もなるたけわれ〳〵の失われた勢力の挽回に意を注いだ。けれどもそれは一小国オランダの代表としては困難なことであり、殊に強大国の代表と争う時や、又その上にとてもそれでは暮していけぬ程の薄給を貰つていること等のため、愈々困難が加わるのである。閣下の俸給は、同僚の諸外国外交官の半分にも及ばない。東洋民族は大変見掛け倒しに参つてしまう民族である。従つて代表外交官の輝かしい生活振りを見て、すぐさまその本国の権勢であると断定するのである。

ドクトル・ボードウインは一八六二年十月二十五日頃、長崎へ到着した。ドクトル・ボードウインは新学期を始めたが、新入生は五十人であつたと思われる。私はかゝる立派な人に、私の仕事をお委せ出来たことを限りなく喜んだ。

大凡十二年間、陸軍軍医学校の教官として働いていた職歴から申して、私より遙かに適任であつた。従つて教授内容は定めし規定通りに進行することであろう。私の帰国の時は、まだなすべき沢山の仕事が残つていた。そしてボー

ドウインは甚だ多岐に渉る改善を行い、ために更に一段と前途に向つて飛躍が加えられた筈である。

君が在任中なした秀れた改善のうち、殊に内科学と外科学を、物理学並びに化学教育から截然と切り離したのは素晴しい。そのことはその道の専門家を招くにあたり、日本政庁にとつても大変有利であつた。早速、軍医将校ドクトル・ハラタマがその任を受けて、日本に来朝した。氏にとつても分割されたこの二つの学課に、新生面を拡くに好都合となつた。この新生面は又、この日本の工業発展にとつて、殊に重大な利益をもち来した。

何故ならばその後、この理化学が又、工業方面と工場機能に大いに応用されたからである。ドクトル・ボードウインは政庁に対し、小理化学実験室の創設を要求した。ドクトル・ハラタマはオランダ本国にいた時に、このような実験室に働いていたからである。

更にボードウインは病院内に立派な外科手術室を設け、且つ図書室も設けた。これ等は総べて素晴しい改善であつた。間もなくボードウインもオランダへ帰るであろう。二、三年後そうなつた時には、再び誰か元オランダ軍医将校がその跡を襲うことになり、再びマンスフエルド君が後任となるかも知れない。当局は尚、多数の職員を医学校に採用する計画を立てることが肝要である。徐々ながら完全を望んで、医学徒養成の医学校を設備する気なら、この事は大切である。何故ならば一人の人が内科も外科も教えようとするには、余りに何時も邪魔なことがあつて、その方へ力をさかれるからである。ボードウインは尚、産科学の課程を設けようとした。この学問に就いては既に述べたように、私がほんの一時的ではあつたが講義をしておいた。学校が繁栄するのを見て私は、こんな喜ばしいことはない。然も私と同国人の経営する病院のことであるにおいては、尚更である。私は長崎医学校を自分の子のように思う。私がその初産をとりあげたからである。大凡三千万の人口を持つ全日本社会に対し、私はこれによつて実際大きな業績を残した。日本滞在中のいろ〳〵の業績で、ドクトル・ボードウイン君の名も決して私達は忘れてはならぬ。彼は又、日本に関するわれわれの知見を大いにするいろいろの事を、供給してくれるに違いない。

私が日本を離れねばならない時刻は、刻々と迫つてきた。日本では楽しかつた事が沢山あつた。わが生涯のうち、最も有意義な年月をそこで過さして戴いた。私にとつては、その頃の事は、いつも愉快な回想である。私自身そこで沢山な事を教わつた。私にとつては、私の経歴中その頃の事は、顕著な一区劃をなしていよう。長崎で沢山の良い友人が出来た。その友人も私ははつきり申すが、東洋だけで出来たものである。誠に限りない友愛が、何のエゴイズムもなくそこに湧いておつた。それどころか、献身的な友情であつた。この友情こそ、旅先の血縁の不足を補つて余りあつた。皆が何事も楽しくしようと、友情の限りを示した。

長崎の南東にあたる大浦にあつた居留地は、徐々に小さな欧洲風な都会の様相を呈してきた。そこには二百から三百の欧洲人が住宅や倉庫を作つて、誠に快適な生活を営んだ。日中は絶え間なく働きつづけ、夜は友達同志の集会も行つた。従つて生活様式は、模範的と申してよかつた。殊に、それが殆んどすべて、若い人達の間のことである。この節の新しい世態となりつつある誘惑も知らず、真面目に且つ模範的にやつているのを考慮すると、尚更そのようにいえる。このような友愛のさなかを、お訣れしなければならぬ日が次第に近ずいてきた。私の胸中を充分お察し下さい。私のオランダへの帰国は、然しながら愉しい面もあつた。私の親兄弟に欧洲で再会出来るのだから。わが父、わが兄弟達、また、わが姉妹達、それにわが友人と再び握手出来る。けれども嗚呼悲しい哉！　住みなれたわが家には、やさしかつた慈愛深かつた母君が今はいまさぬとは、母上はどのようにか、日本にいた私との再会を愉しく心に画いておられたことか――母上の死は私には二重の苦悩を与えた。一つは一日として母君の看病らしい事もしなかつたことと、今一つは親愛の母上を一刻も早く病から救つて、楽しい生活に導き得なかつことである。

最後の日は、終日荷造りに暮した。私の数多い友にお別れの挨拶をした。なかんづく或る友と別れることは、私の心の中で愁嘆に堪えなかつた。遠き遙かなる東洋では、医師は唯単に友人や医者であるというよりは、更に〳〵同時に病床の看護人であり慰問人でもあつた。病に臥せる人を慰める縁者は、旅先の外地にはいないからである。お互い

の関係は従つてこのように随分に美しいものであるが、時にはしばしばそれ程また心を痛ましめる事もあつた。お別れの日に町内に挨拶するのは実に辛かつた。町内の人とは充分懇意にして戴いた。又それ程永らく、そこに住んでいたもの。町内ではいろ〳〵の相談にも乗り、又初めからその発展を、この眼で見ていたからである。内心常にその繁栄を喜んでいたからである。

私の生徒にも『さようなら』をしなければならなかつた。私の病院にも。私の日本人友人にも。常に親切と善意のこもつたまなざしを投げてくれた誰彼と、別れを告げなければならぬとは。

決別の宴で代る代る述べられた言葉は、私にとつては感激に堪えぬ一時であつた。私のために、国を同じくするオランダ人と、英国人や米国人の設けたあの宴席、今も尚心愉しく、あの情景を眼のあたりに描くことが出来る。

情愛のこもつた数々のしるし。それはどの面からしても思い出せる。それは皆、私の業績に対する美しき褒賞であつた。私は心からなる感謝の微意を、今改めて捧げる。私の滞在中生活を心よくして下さつた人々と、私の船出にあたり栄誉あり高貴ある餞別を下さつた人々に、この品は私の生きている限り、生々しい追想のよすがともなるものであります。

敬虔なる至誠の情をこめて、第一に将軍陛下に感謝し奉ります。そして陛下のしろしめす最高政庁へ。次に私の温い鳴謝の念を、総べての日本の役人達へ。高き身分の人にも、低い身分の人にも一様に。その人達は誠によく私の業務に協力して下さつた。今こそ、私の最大の願望は、私が後に残した友人達の繁栄ならんことである。それだけはいつも心に、いたく残つている。他の人にもすべてが、どうぞうまくいくように、そして〳〵あなた方が私の帰国の日に私に与えて下さつたものと同じように、心からなる感激と友情のしるしを、あなた方にも等しくもたらされんことを！

十一月一日にこそ、私が乗船したオランダ商船ヤコブ・エン・アンナ号は出航した。船上に長崎駐在の欧洲人全員

が集合して、湾外にまで私を見送つて下さつた。長崎政庁は更に鄭重にも一高官を派遣して、私の船路の平安ならんことを祈つて下さつた。他方、長官閣下は日本の国旗とならんで、オランダ国旗を病院と飽の浦にある蒸汽工場にも掲げるように指令を発して下さつた。

私はヤコブ・エン・アンナ号で上海に渡り、そこから陸路で香港とシンガポールを経て、オランダへ帰つた。香港に滞在したのは、遊覧のためであつた。広東と嫣港（マカオ）の両都市とも、大変興味があつた。十二月卅一日に私の生家に到着した。そこには父、兄弟と姉妹達が私のために幸福な、然し同時に誠に心ときめく大晦日の宴が整えてあつた。

（昭和三十二年四月十八日抄訳）

あとがき

私の祖父である荒瀬幾造（後に収甫と改む）は、山口藩主毛利敬親公の許しを得て、周防の国三田尻から、ポムペ先生のもとに入門しましたが、それは万延元年秋のことでした。業を修めて帰郷後、祖父は医業の傍ら警察医・山口県医術開業試験委員・県立山口医学校教諭などを務め、医学教育と済生の業に励みました。しかし明治十七年十月五日（旧暦）四十四才で病死しました。今の防府市野島に往診して、僅かの間の病臥であつたといいます。幾造の父武五郎は、津藩の儒者猪飼敬所と京師の書家貫名海屋の弟子でありますが、わが子の早逝を悼み施徳院釈孝順収甫居士と戒名をつけ、自ら位牌にこれを刻んでいます。落胆して自分も二ヵ月後の十二月十六日に、七十八才で歿しましたが、幾造が長崎留学中、自分も長崎奉行久松家に仕官しています。

幾造は存命中恩師ポムペを追慕してやまず、毎年日を定めて親戚知友を招き、宴を催おすを楽しみにし、人々はこれをポムペ祭と称えていました。その席には、長崎から持帰つたポムペ先生の遺像を掲げることを忘れませんでした。明治四十二年頃と思いますが、ある晩幾造の未亡人すなわち私の祖母とよが私に、お前は大きくなつたらポムペ先生の御恩を忘れずに、必ず立派な医者になつてくれと、諄々と訓戒したことがあります、私はまだ小学校の頃でしたが、暗いランプの影とその夜の祖母の顔貌は今に彷彿としています。

幾造並びにその父武五郎逝去後は、家運に浮沈がありましたが、とにかく医業を継承して私で三代になります。これは全くオランダ医官ポムペ先生のお蔭と存じます。

このたび先生の遺著「日本滞在五年」の一部を私が訳しましたが、発刊が許されて広く皆様に読んで戴けることは、私の生涯の光栄であります。祖父幾造も菩提所明覚寺の地下で感佩していることでありましょう。

国立善通寺病院長　荒　瀬　進

学界消息

杉田玄白展……今年は杉田玄白の物故百四十年に当るので、杉田姓発祥ゆかりの地である横浜において、神奈川県立図書館と本会の共催により六月五日より十日まで各種史料約六十点を集めて記念展覧会を開いた。また六月八日には同館において本会役員により啓蒙の意味で公開講演を行つた。

解体新書のできるまで　小川鼎三

蘭学事始について　内山孝一

杉田玄白の随筆　緒方富雄

当日は杉田玄白の子孫宗家分家とも三氏出席、また門外不出の「杉田家記」が初公開された。この展示の解説は稿を改めて本誌次号に掲載する。

藤林普山百二十年祭……京都蘭学の大家藤林普山死して百二十年に当るので、出身地の京都府綴喜郡田辺町では景仰会主催の下に十月二十日菩提寺の田辺町字水取西光寺にて墓前祭引続き記念講演会を行つた。講演は関西支部長中野操氏、記念出版として山本四郎氏編の小伝が頒布された。

日本医史学会関東地方会……十月二十日慶応大学医学部にて開催、特別講演として佐藤美実氏の「近世産科学発祥の府としてのオテル・デュ」があり一般研究発表十一題に上り盛況を極めた。

関西地方会……「医譚」発刊二十年三十号を記念し地方会を兼ね創刊の功労者中野操氏慰労祝賀会を、十月二十七日大阪の牟田病院で挙行。詳細後報。

編集後記

○第八巻は今年いろいろな記念行事があるので特集号続きになりそうだ。第一号を杉田玄白特集号にするつもりで準備していたが、長崎大学の西洋医学教育発祥百年記念会からの要望でポムペ原著の抄訳を二号合併して掲載することになり、このような体裁でお手許にお届けすることになつた。

○口絵写真は何れも今回新出の貴重史料、荒瀬氏の本文の名訳と相まつて一段と光彩をそえることができた。この出版に当り同記念会から本会に対し多大の御援助をいただいた。ここに改めて深甚の謝意をささげる。

○会誌の遅刊をとり戻すため次号は前に用意した杉田玄白の記念特集号にして原色版の口絵を入れ、思いきり図版を多く入れて玄白史料の決定版にするつもりである。年内には第三号をお届けする予定でいる。

○毎度のことながら本年度会費未納の向は至急振替で八百円也御送金をお願いしたい。なお都合により当分の間事務連絡は左に願いたい。「横浜市中区長者町三ノ三二　石原明宛」

日本医史学雑誌（第八巻　第一・二号）

昭和三十二年十一月五日　印刷
昭和三十二年十一月十日　発行

編集兼発行者　日本医史学会　石原明　横浜市中区長者町三ノ三二

印刷所　杉本紙器印刷株式会社　横浜市南区白妙町二ノ七

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Jaurnal of the

Japanese Society of Medical History.

Vol. 8. No. 1. 2. November, 1957

Special Number for Hundredth

Aniversary of the Beginning of European Medical

Education in Japan.

CONTENTS

Report on the Medical School at Nagasaki by

Pompe van Meerdervoort (1866).

Translated into Japanese

by

Susumu Arase

The Japanese Society of Medical History

(Department of Physiology. Nihon University. School of Medicine.)

Itabashi. Tokyo, Japan.